# とある学生の大学生活

観測者0906

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学生の大学生活

【Ｎコード】

Ｎ３５５５Ｙ

【作者名】

観測者０９０６

【あらすじ】

とある大学生天草（あまくさ）　政志（まさし）はある能力を持っていた。普通に過ごしたいと思っていた彼は、超能力者に絡まれてしまった。自分自身の能力に恐怖や不安を抱えている彼は、今日も大学卒業を目指して日々勉強に励んでいた。

彼もまた、学園都市の副産物であった。

原作に沿った話で進行していきたいので、「こんなの禁書目録じゃない！！」とか思っても、暖かく見守って下されば幸いです。

書いている途中でこんな作品がありました。「とある最強の水分支配《ｈｙｄｒｏ　ｃｏｍｍａｎｄ》」この作品とは無関係なのでよろしくお願いします。晃甫さん、気が付かなくて申し訳ございません。

## 第1話（出会い）（前書き）

初めてデス。観測者０９０６です。宜しくお願いします。

# 第1話（出会い）

昔から俺はみんなに恐れられていた。いつも1人で・・・

「懐かしいな。こんな夢を見るなんて」

俺の名前は天草政志（あまくさ まさし）。学園都市の大学生1年生だ。最近は、不穏はニュースもなく、至って平穏な生活を送っていた。

しかしそんなことをいっていられる時間ではなかった。いくら大学生といっても学習しなくてはならないので、遅刻はさくがにまずい。学校に遅れてしまうのでさっさと身支度を済まして学校へ行った。

＊＊＊

「ねえ、この都市伝説知ってますか皆さん？」

こんな感じで話しているのは佐天涙子だった。彼女はいつも都市伝説なんかを調べては、美琴達に話しかけていた。

「結構、前の都市伝説ですよねそれ。一時期はとても流行っていたんですけど・・・」

こういっているのは、初春飾利という少女だった。彼女はコンピューターのことにとても詳しく、裏では守護神（ゴールキーパー）などと呼ばれているのに気付かない彼女であった。

「そんな伝説はやるわけないではありませんの。だいたい、そんな噂有名ではありませんのよ」

「そうそう。それにそこまで善意的にやってくれているんだから、名乗り出るでしょう」

彼女らは白井黒子と御坂美琴の2人だった。彼女らは常盤台中学の1年生と2年生のルームメイトであるが黒子は美琴のことを尊敬と不純なまなざしで見ているのである。

「それが最近またやっているらしいですよ。応用能力（オーバースキル）っていう名前で」

「そうなんですか？昔はもっとカッコ悪かった記憶があるんですけどねぇ」

「ねえ、今度そいつ探してみない？」

いきなり美琴がいい出す。それを肯定しようとする涙子だったが。

「ダメですよお姉さま。風紀委員（ジャッジメント）の権限を使ってでもとめに入りますわよ」

「えーそれはないですよ白井さん。せっかくこの話題を提供したのに・・・しかもすぐ近い第7学区にあるんですよ！！」

「そうよ行きましょう黒子。いってそいつの本性を暴いてやりましょう！！」

そういって、彼女達はファミレスを出て行くのであった。

＊＊＊

「おいおい、お前僕の財布ちゃんじゃなかったかなぁ。早く出した方が命のためだよ」

天草政志はチンピラに絡まれていた。ちょっと近道をしようとしたら絡まれてしまったのである。しかし彼は全くおじけていなかった。

「怪我したくないのはお前らのほうだろ。俺は能力者だぜ、そのぐらいお前の頭でもわかるだろう？」

「こいつ、俺らのことわかってないぜ。はっはっは！！みんな出てこいよ！」

そういった後、彼の後ろから４，５人ほどの人が出てきた。

「俺らも能力者なんだぜ。しかも、強能力者なんだぜ。あきらめろよ。・・・ァが！！」

彼らは全員床に倒れていた。おそらく足の骨を折ったのだろう。何が起きたのかわからないという目でみていた。

「「待ちなさい！！」」

美琴達もその場にいた。政志にも気付いていなかった。理由は簡単。黒子が空間移動（テレポーター）の大能力者（レベル４）だ。

「何だお前ら、ガキがこんな所に来るもんじゃねえぞ。ほら、帰れ帰れ」

「あなたを暴行、その他諸々で連行します。ついて来て下さい」

「やだね。先に暴力をふるってきたのはこいつ等の方なんだからな」

「それなら過剰防衛ですの」

「おっ、そっちは超電磁砲（レールガン）じゃねえか。超能力者（レベル５）がこんな所で何やってんだ？」

「どうだっていいじゃない。それよりアンタの能力なによ。教えなさい？」

「いいこと教えてやる。俺の能力は水流操作（ウォーターコントロール）ださっさと帰んな。別名は応用能力（オーバースキル）だ」

「なら都合がいいわ。勝負しなさい。そうすればいいわ」

「ダメですよお姉さま！！過剰防衛でもダメですわよ！！」

「仕方ない手合わせ、ということならやってやってもいいぞ、超電磁砲？」

「いいわよ。やってやろうじゃない」

## 第1話（出会い）（後書き）

次回の更新は遅れるかもしれないです

## 第2話（戦い1）（前書き）

バトルメインで行きます。原作の方からは少し外れていきますので
それでもいいと思う方は読んで下さい。宜しくお願いします。

## 第2話（戦い1）

天草政志と美琴達、合わせて5人は美琴達がよく来る川辺にいた。よく来ると言っても美琴が上条を追いかけるだけであったが、

「ここならいいでしょう、天草！」

「お姉さま！緊急の時は私が止めに入りますからね！」

「わかってるわよ黒子」

「作戦会議は終わったか、お譲ちゃん達」

天草は余裕な表情をしていた。

「あなたの能力は水流操作（ウォーターコントロール）でしたわよね。一体水の何を操ることができるんですの？」

「いやあ、全般って言っていた方がいいかな」

「そんなのどうでもいいわよ。アイツは能力者を狩っていた悪い能力者なんだから」

「イヤな風に言ってくれるな。先に手を出したのは彼らなんだたらさ」

「それじゃあ行くわよ！！」

その時天草の体に電撃がぶつかった。・・・しかし天草は動じな

かった。動じなかったのではない。動じることができなかったとでも言った方がいいのだろうか？

「どう？観念した？まあ、私の電撃を喰らって立っていられる奴はあのバカしかいないけど」

「何勝手に終わらせてるんだ、クソガキ？？」

「えっ？何で立っていられるわけ？そんなはずないでしょう」

「そんな？お姉さまの電撃を喰らって生きているものなど・・・」

「美坂さん、手加減したんですよね？・・・そうにきまってます！」

彼女らは動揺を隠していられなかった。それもそのはずだ。彼女の近くには超能力者（レベル５）がいて学園都市ではレベル５が最も強いのだ。しかも美琴は第３位の能力者だ。そんなもの防げる人間は１位か２位の２人だろう。

「俺の能力は水の全般を操ること。その理論を応用して体の周りに薄い水の膜をはっているんだ。しかもその水の膜はただの水の膜じゃない。水圧７０００メートルをゆうに越えているんだからな。さっきの電撃は全部水の中にたまっているんだからな。」

「ならこれはどうよ！」

美琴は砂鉄の剣を作っていた。彼女の得意分野は能力のバリエーションの多さだ。しかし水流操作（ウォーターコントロール）の方がバリエーションは多い。

「川辺を選んだのが間違えだな。水がない土地を選べばガキの勝ち

だったのにな」

そういって天草は背後の川から大量の水を持って来ていた。

「何なんですのあの水の量は！？」

「レベルは何なのよ！？」

美琴と白井は流石にここまで予測はできなかった。

「最大容量、３トン。有効範囲２００メートル。学園都市では最大級の範囲だな」

砂鉄の剣を丸ごと飲み込む水を彼女たちの目に焼き付けられた。

「ならこれならどうよ。私の別名にもなっている技よ」

周囲の砂鉄や石が小刻みに震えていた。

「超電磁砲（レールガン）か。面白い技だな、がしかし・・・」

音速の３倍の砲撃が天草に突き当たった。

「ごめんな、こんな簡単に勝負が着いたらガキのプライドにも関わるだろう」

天草は美琴の真後ろにいた。それに気がついた美琴は後ろにもう１つ超電磁砲を撃った。が、

「だから、そんな大技何発も撃っちゃいけないだろ？」

「アンタ何したのよ！！」

「なあに簡単なことさ。水をを足の裏で滑らせ、高速移動したのさ。摩擦の方は液体防御（ウォーターガード）でな。クソガキは帰って勉強でもしてな」

「さっきからお姉さまをクソガキ、クソガキと！もう我慢なりませんわ！！」

白井の空間移動（テレポート）で天草の体に鉄柱を打ち込んだ。

「だ・か・ら効かないっていってんだよ！」

「っあが！」

白井の体が吹き飛んだ。天草の水流操作の前では何も意味をなさなかった。

「ここまでいいだろう、ア　レ　イ　ス　タ　ー　聞こえているよな」

そんなことを言って天草は水流移動で帰って行った。

その後の出来事には関与しない形で・・・

## 第2話（戦い1）（後書き）

いやぁ、オリキャラ無双でしたね。しかも佐天さんと初春さんは完全に無視状態ｗｗｗ更新遅れるかもとかいって翌日更新。そんなドタバタですけど暖かく見守って下さい　さようなら、誤字脱字など指摘お願いします

## 第3話（裏の世界と大学生活）（前書き）

やっと天草が大学生活する内容に入ります。お気に入りに登録してくれた方々ありがとうございます。能力名が多いので、そこは勘弁して下さい。では、

## 第3話（裏の世界と大学生活）

＊＊＊

「天草、もっと成果を出せんのか？お主の父上はもっとすごいことをしていたぞ」

「うるせいな、ジジイ！テメエは俺の相手をしているだけでいいんだ！」

「ほっほっほ、そう怒るでない。ハアッッ！」

＊＊＊

「変な夢だったな・・・そろそろ飯でも食うか」

天草はあの戦いの後すぐさま逃げていったのだ。

「しっかし、超電磁砲は強かったなあ。まっ水流移動（ウォータースライド）の速さには誰にもかなわないがな」

そんなことを言って天草は朝食の準備を始めるのであった、が・・・

「食パンがない！！　牛乳もない！あげくなはてに冷蔵庫の中は空っぽ！」

このあり様だった。

「朝飯をコンビニの弁当にすると活気がわいてくるもんなんだな」

大学は学園都市に２０個しかない。学園都市はそもそも学校の町であって、卒業すれば出ていくのだ。そうなると大学の数は高校よりもグッと少なくなる。

「やべぇ、最初の授業遅れちまう！こうなったら近道！」

近道をすると昨日のようにあんなことになるのだが、そんなことを気にしていられる時間ではなかった。

裏道に入った瞬間、彼の目の前は日常（おもて）から非日常（うら）の世界へ変わってしまった。

「ここの角を曲がって左に～」

「？？超なんなんですか。下部組織が情報の隠ぺいをしていたんですけど」

そこにいたのは絹旗最愛、別名　窒素装甲（オフェンスアーマー）だった。彼女が蹴散らしていたのは町の不穏分子。上層部に敵対しようとしていた連中だった。

「っげ、窒素装甲じゃねーか。何年ぶりだ？」

「水流操作（ウォーターコントロール）さんじゃないですか。なぜ超ここにいるんですか？」

「ちょっくら大学の近道をしようとしてな、すまんな」

彼らは「暗闇の５月計画」で一緒になった暗い過去を持っていた。

「そうですか、でも見られたんで超通すわけにも行かなくなってしまいました」

「そうか、なら仕方ないな。でも俺は平和な日常に戻りたいんだ」

「そうですか　ッッ！？」

そんな会話の中、平和な日常の中ではけた外れの音が聞こえた。

「暗闇の５月計画」で得た絹旗の能力は自動防御機能。天草も同じ自動防御機能を持っていた。

「通してもらうよ、窒素装甲」

そんな中、暗闇から猫ったるいが聞こえた。

それは、麦野沈利だった。アイテムの実質的リーダー。学園都市の超能力者（レベル５）で第４位の力を持つ彼女は原子崩し（メルトダウナー）は電子を波でも粒子でもない状態に固定しそれを自由自在に操れる能力だった。

「絹旗、何こんなよわっちいクズに負けてんのよ。さっさと終わりにして帰りたいんだけど・・・」

「むぎの、この人大能力者（レベル４）」

後ろで呟いていたのは滝壺理后だった。彼女はＡＩＭ拡散力場を観測することができる能力追跡（ＡＩＭストーカー）大能力者だった。しかし体晶を使わなければ、能力は大能力まで行かないのが難点であった。

「おやおや、原子崩しまで現れましたか。これは困った物です」

天草はいつもの口調で話すことができなかった。「暗闇の5月計画」では一方通行（アクセラレータ）の人格を植え付けたため、口調までもが一方通行のようになってしまう。それを防ぐために別の口調にしたのだ。

「べらべら喋ってないで、絹旗を離してくんないかな。こっちには仕事が山積みなんだよ」

「いけませんねェ。こんな簡単に超能力者と大能力者が釣れるなんて・・・」

「うるさいんだよ、抵抗するならてめぇの肉焼いてまる焦げにしてやろうか！」

「むぎの、体晶は？」

「まだいいさ。使う時になったら使うから用意だけはしておきな」

天草は冷静だった。彼は水を操ることができる。電子は水に触れさせれば水酸化物イオンと水素イオンに分かれて電子は無くなると思っていた・・・が電子の量が膨大過ぎた。

彼は常に水を持ち歩いている。しかしその1？の水が一瞬でイオンになり、イオンが気体として空気中にまかれてしまった。水素は水ではない。水はあくまでもH？oなのだ。Hだけでは操ることなど到底不可能。

「さっきの冷静さはどこへ行ったのかなあ！？」

「うるさいですねェ。さっさと終わりにしてくれませんか？」

そういった天草は余った水で地面を叩いた。叩いたと言っても割ったという表現にした方がいいのかもしれない。叩いた地面からは大量の水が出てきた。

「知ってるかァ、学園都市は下水を地下のパイプで送っているンだ。供給にしてもそォだ。きれいな水と汚い水どっちで攻撃してほしィ！！」

「っち、やっかいね。でもこれなら！！」

麦野はまた電子を放っていた。しかしそこに彼の姿はなかった。あったのは流れる水と倒れた絹旗だった。

「逃げたわね。でもあんなに速く移動できるのかしら？」

「っ超あれでしょう。水流移動でしょうね。」

「水流移動？なにそれ、きぬはた、おいしいの？」

「あれですよ、水を使って滑らせるんですよ。それで高速移動できたと思います。わたしも窒素で超移動できるんですが、なにせ数センチが限度ですので」

「まあ、いいわ。次に会ったら必ず殺してやるから」

そこでコール音が鳴った。携帯のコール音、至って一般的な音だった。それにもかかわらず麦野は出ようとしない。コール音が１０回を超したあたりで麦野は、

「出ようとしてないのわかんない訳！！気付けよこのバカ！！」

『私だって好きでかけてるわけじゃないんだから！！好き勝手言わないでよ！！　で次の仕事の依頼。この犯行グループのリーダーがとある大学の理事長なのそこを襲撃して。図面は今送るから。』

「無理、私水流操作とやってたからそいつ殺すまで仕事は受け付けないよ。バ――カ！！」

『お得情報その1、その大学に水流操作が通ってる。』

「いくよ。絹旗、滝壺」

「フレンダは超どうするんです？」

「電話かけといたから問題なし。じゃいくよー」

「おー」

「そういってくれるのは滝壺だけか・・・」

悩んでるふりをする麦野だった。

＊＊＊

学校には遅れてしまったが2時限目の授業からはちゃんと受けられたので良かった。そんな中、アイテムがやって来たのを知る由もない天草であった。

## 第3話（裏の世界と大学生活）（後書き）

すみません、次回の更新は遅れるかもしれないです。それではよろしくです。時系列は魔術に入って行きたいです・・・

## 第４話（崩壊する学園生活）（前書き）

どうも『観測者０９０６』ですｉｎｄｅｘ｜ｃｏｍｉｃから変えさせていただきました。今回はバトルメインで行きたいと思います。

アイテムや超電磁砲も出たんでそろそろ過激になります。

ではお楽しみください。

## 第４話（崩壊する学園生活）

＊＊＊

「お主、本当に学園都市に行くんかのう？まだ引き返してもいいのだぞ？」

「うるせージジイ。テメエの教えなんて信じねえからな」

「元気じゃのう。まだできたばかりの『学園都市』という場所に行くのかのう？」

「面白そうだからだ！！それ以外の理由はない」

「お主もわかっておろうが、あれ（・・）は使っては行かんぞ」

「んなことわかってるって。それじゃあ行って来るぞ」

＊＊＊

ガラガラと音が聞こえた。音がした方向をを見る生徒が多数いた。彼らが見た先には天草政志（あまくさ　まさし）がいた。しかし彼らは授業中だったので真面目にノートをとっていた彼らにとって天草は邪魔者でしかなかった。

「ぎりぎりセーフ・・・がしかしここから聞いても全くわからん」

全くを持って彼らの視界には入っていなかったが、天草だけは違った。

「近くに能力者がいるな。それも複数名。さらに大能力者が2人超能力者が1人。恐ろしいな、でもさっきの感じとに似ているな。多分原子崩し（メルトダウナー）と窒素装甲（オフェンスアーマー）とあと一人訳わかんない奴か・・・」

そんなことをつぶやいていた彼であったが、そんな学校生活をいきなりぶち壊す物が飛び出てきたのは言うまででもないことだった。

＊＊＊

「着いたわよ、絹旗、滝壺、フレンダ」

「傷は治ったのきぬはた？」

「学園都市の超得体のしれない化学物質で超治りましたよ」

「あんたら、なんかあったわけ？仕事してたみたいだけど？」

「お前は黙って仕事しな、フレンダ。アンタさっきの仕事はいってなかったから報酬減額ね」

「えーーそれはないよ麦野〜〜」

そんな彼らの今回の仕事は大学の不穏分子の削除。大学の理事長ら15名を殺すことだった。そのためなら、大学の崩壊ですら容認してしまうという上層部の命令だった。

「ここにいるのかな、水流操作（ウォーターコントロール）。たのしみだねぇ」

「ねえねえ絹旗、麦野になんかあった訳？」

そう小声で話すのはフレンダ＝セイヴェルンであった。

「ああ、あれでしょうね。さっきの仕事で超邪魔されたんでしょう、といっても私も超負けたんですけどね」

「ええーー！！絹旗でも負けちゃったの？」

「はいはい、そこ駄弁らない。報酬減額っと」

「ごめんよ麦野ー　っで仕事は？」

「大学の破壊とその経営陣の削除。簡単だからこれはあんたらに任せるわ」

「麦野は何してる訳？」

「私は水流操作を殺しに行ってきまーす」

「なるほど。超わかりました」

「それではよーいドン！！」

こうして彼女らの仕事（にちじょう）が始まった。

＊＊＊

天草はとっさに１？のペットボトルのふたを開けていた。理由は簡単、自分の身に危険を感じたからだ。身の危険といっても常人に

はわからない感覚であった。普通一般人にとって目の前に石が落ちていたとする。その石を見て右や左によけるのは常人感覚である。しかし天草にとってはそれでは遅いのだ。同じ例でいうと、石が見えた瞬間に道を変える。それほどの精神でなかったら、彼の住んでいた世界では生きていられないのだ。

「よう、水流操作。生きてなきゃ困るよ。さっきの戦闘でアンタ逃げたんだからね」

「起きてますよ。こうやって口調を抑えてるんですからねェ」

「さっきの借り返すわよ。これでね！」

原子崩し、それは多大な破壊力を持っているが弱点がある。それは、連続して攻撃できないことだ。連続で攻撃しようとすると、体の方が先に分解を始めてしまうからだ。

「水流移動（ウォータースクロール）、水流防御（ウォーターガード）その他もろもろ調べさせてもらったわ」

「それはそれはなんとも手間のかかる作業でした。ではこちらからも応戦させていただくことにしましょうか」

「それは出来るかしら？下水管や水道は全部上層部に頼んでストップさせてもらったわよ」

「・・・」

「それと出入り口は全部崩されてあるから外には出れない。アンタの持っている1？の水で終わりにするわよ」

「なんと、そこまでしましたか」

天草は内心焦っていた。彼はただ水を操ることしかできないのだ。無の場所から水を作りだすことはできないのだ。

「ほらほらほら！！どんどん行くわよ、このクソ虫野郎！！」

天草の装甲がどんどん無くなって行くのが麦野の目でも確認できるほどになっていた。

「水がないからって逃げてんじゃないわよ！！この腰ぬけが！」

「仕方がありません。これは到底使うものではありませんが使わせていただきます」

天草は右手にタロットカードの様なものを持っていた。それが何を意味するのかは今の麦野にはわからないが、麦野には遊びの様な物にしか見えてなかったはずだ。

「何遊んでんだよ！！ちゃんと戦って死ねよバカ野郎！！」

「手を抜いているわけではありません。下準備が必要なのですよっね！！」

その瞬間天草の周りで爆発が起きた。原子崩しが直撃したのだと思っていたが、実際はそうではない。彼の周囲に大量の水がわき出ていた。

「っな！？下水の処理などは完璧だったはず！なのに何で？？」

「あなたに魔術といってもわかるはずがないでしょう。たとえわかっていても信じないと思いますよ」

天草と聞いて珍しい名字だな、と思う人は一般人と自覚していいと思う。でも、天草と聞いて天草式と思う団体もいる。

そう天草政志は魔術師だったのだ。

しかしここで疑問に思ってほしい。能力者に魔術は使えない。その定義は今も未来も変わらない。もし使ったとしても体のどこかに負荷がかかってしまい、怪我をするのだ。

しかし彼は例外だった。彼は学園都市で第一号の能力者、今の能力開発には暗示や薬が使われるのだが、最初の能力開発はそうではなかった。脳の一部を削り取ってしまうという至って簡単に開発できるものだった。しかし今ではこのようなやり方は行われてはいない。

危険すぎるのだ。天草も入れてこの実験を行ったものは４００名。そこで能力が出てきたのは彼ただ一人だった。そこから研究者は研究し今の開発の仕方を生み出したのだ。

「危険なので終わりにしましょう。ほら」

「ッひ！！」

麦野はあっさりと終わってしまった。

天草は生み出した水で麦野の首を圧縮していた。結局彼女は何の成果も残せないまま仕事は完遂した。

## 第４話（崩壊する学園生活）（後書き）

どうも、説明文多いですね。そもそも能力者が魔術を使えないのは脳みその構造が違ってるだけであって、天草の実験のように術者の脳みそを変化させれば魔術をその脳みそに合わせることだってできるはずです。

次回もよろしくお願いします。

## 第5話（再）（前書き）

どうも、これ書いてる時に気付いたんですが「とある最強の水分支配《ｈｙｄｒｏ　ｃｏｍｍａｎｄ》」この作品を知ってしまいました。知っていた方には申し訳ございません。これとは全く世界観が違うのでご了承ください。

# 第5話（再）

魔術、それは才能の無い人間が才能のある人間に追いつくために生み出された技術。知っている者は少ないが世界の上に立つ者ならば知ってなければいけない技術だった。

「ああー・・・やっちゃったよ・・・」

天草政志は後悔していた。相手はたかが超能力者（レベル5）。世界を見渡せばもっと強い人間はいる。それなのに魔術を使ってしまった。

「やっぱタロットカードじゃぁ、これが限界だよな。お札じゃないし」

彼の使った魔術はもともと不作に悩まされた農民が雨が降るようにと、神々にお供え物をする形で使われていた。それを今回は彼の持っていた昼食　ハンバーグ弁当を生贄として水を生み出したのだ。

「あれ？今回はやけに静かだな」

彼が魔術を使える理由は他の能力者と脳の構造が違うからである。同じ脳の構造であれば、彼は運悪く死んでいたかもしれないのだ。

辺りを見渡す彼はある異変に気付いた。ここまで大騒動があったにもかかわらず、警備員（アンチスキル）や風紀委員（ジャッジメント）がこないのだ。彼は事情を知らないので無理はないが。

「おかしいな、風紀委員に連絡でもするか」
連絡を取ろうとする彼だが携帯を見ると圏外の表示になっていた。上層部が第１７学区の回線を切ってしまったのだ。

＊＊＊

彼は結局自分の寮に帰えることにした。大学の情報を調べてみたが、なかったことになっていた。おそらく、上の連中が情報操作でもしたのだろう。

「あ～～また大学が減っちゃったよ。どうしてくれるんだっつーの」
大学が減る。こんなことを知っている人間はおそらく数名しかいないだろう。先程も言ったが上層部はこれを隠している。もともと、２５あった大学だが今は１９しかない。

「もう、裏道は通らないぞ！前から裏道を通ると変な奴らにしかあわないからな」
変な奴らといってもはたから見ればそうかもしれない。だが、見方を変えれば超能力者と大能力者に会っているのだ。まあ、彼も大能力者の一人なのだが。
とそんなことを考えて電車に乗ろうとしていた矢先に、彼はまた変人に会ってしまった。
そうそれは御坂美琴と白井黒子だった。彼女らもまた、買い物に

来ていたのだ。

（やべえ、ほんとにやべえよ。つーか前戦った時俺、逃げたよね。うん、逃げた。あの性格じゃあまた勝負してくれって逃がしてくれねえよ。水はあるかな？）

彼があさっていたバッグにはペットボトルの空と勉強道具しか入っていなかった。

「ん？この電磁波？水流操作（ウォーターコントロール）！！」

「お姉さま、こんなところに水流操作がいるわけないですの

「いや、いるわ。ほらそこに！！」

彼女が指指した先には誰もいなかった。しかし彼女は見過ごしてはいなかった。　そこには少量であるが蒸発しかかっている液体があった。

「ほら、さっきまでいたんだわ！行くわよ黒子。あいつには逃げられたけど、ほんとは水しか操れないただのヘボ能力者じゃない」

「お姉さまだって人のこと言えませんのよ。ただの電気しか操れない能力者なんですもの」

「つべこべ言わずについてきなさい！」

「仕方ありませんの」

こうして追う側と逃げる側の青春が始まった。

「おっかしいな～。ここに残っていたはずなんだけどなあ」

「お姉さま、門限まであと2時間ですの。早く帰らないとあの寮監にこっぴどく怒られてしまいますわよ」

「門限なんて気にしない。次！！」

「ここの裏路地！！・・・も居ないか」

「私の空間移動（テレポート）にも限度というものがありますの」

「じゃあ、次で最後するからもう少しだけ」

「しょうがないですわね。本当に次で最後ですわよ？」

「駅前に　　って！！いたーーーーーーーーー」

「本当にいたんですの！？」

「あ・・・　　逃げ切れなかった」

「今度こそ勝負しなさい。アンタ大能力者でしょう。私の様な超能力者より弱いってことでしょう？それなのになんで勝っちゃうわけ？意味わかんない。勝負よ勝負」

「やだね」

そんなやりとりをしていた彼らだったがそのやり取りもそこで打ち切られることになった。

ズドオン！！そんな激しい音とともに目の前のビルが崩れていった。あまりにも現実ではないような目で見る白井と、現実世界でもありうるというような目で見る美琴と、これが日常だと言わんばかりの目で見る天草がいた。

その下にはなんと小さな子供が３０名程度いた。とっさに美琴は超電磁砲（レールガン）を撃とうとするが、白井はそれを止めた。何せ小さな子供だ。超電磁砲の衝撃波を受けただけで転ぶような子供を眼の前に撃つには良心が咎めたのだ。しかしビルは崩落してくる。歯噛みしていた彼女よりも天草は迅速に動いた。

まずアスファルトに隠れていた水管が破れていた。そこから大量の水を操る彼は化け物に近い存在になっていた。落ちて来るビルをその大量の水が支えたのだ。そうしている間に小さな子どもたちは白井の指示で安全な場所に避難していた。

「ふう、こんなものでいいかな」

そういって彼は水で支えていたビルの塊を粉々に砕いた。それはもうコンクリートとしてとらえることができないくらい、水の力にすごさを感じていた美琴がぼうっと立っていた。

そこへ警備員の車が来た。警備員はなぜか天草に深々と敬礼していた。

「黒子。何で警備員の人達、あいつに敬礼してるの？」

「お姉さま、私も昨日調べてみたんですの。彼は天草政志２１歳。大学生ですの」

「それとこれとなんの関係が？」

「天草政志は・・・初代風紀委員委員長でしたの。あくまでそれは非公式ですが」

「風紀委員長？そんな人っているの。風紀委員しか見ないけど」

「今はその席は空席になっていますの。副委員長ならいるのですが」

「誰も委員長になろうとしないの？」

「なろうとしないのではなく、なれないんですの。委員長の権限はとても大きなものですの。だから大抵の風紀委員は委員長に志願します。ですが委員長の選別は警備員が行いますの。そこで受かった者が委員長になるんですの」

「じゃあ委員長にふさわしい人はまだアイツだけってこと？」

「そうなりますの。彼は実力、頭脳ともに優秀でしたので委員長になれたのです」

「そんな能力強い人や、頭のいい人なんて他にもたくさんいるじゃない」

「そうですの。ですからこんな噂が何年も前から流れているんですの。『風紀委員委員長は永遠の架空ポジションだ』と」

「そんなのアイツに聞けばわかるじゃない」

「お姉さま！乱暴ごとはおやめ下さい」

美琴は早くも天草に攻撃しようとしていた。が天草はそれを見きっていたかのようにかわした。

「アンタ、風紀委員長なんですってね。いい気分なんじゃない？」

「そこまでいい気分じゃねえよ。仕事は多いは、能力者が暴れるはで大変なんだよ」

「でも今はそこには誰もいないんじゃない？委員長？」

「ちょっと、イラっときたな。勝負、受けて立つよ」

「じゃあ、そこの公園でね」

３人は公園へ移動してきた。そこで彼女は驚くべき真実を聴くこ

とになる。

「自己紹介をしよう。俺の名前は天草政志。元風紀委員委員長だ。他に質問は？」

「ありますの。なぜ風紀委員委員長はずっと空のポストですの？私が風紀委員になっているときからずっと空席でしたの」

「それを答えていいかどうかはわからないけど１つだけいいことを教えてあげよう。この世界は少し狭い。ただそれだけだ」

「答えになっていませんの！！」

「それじゃあ、相談してみよう。これを教えて良かったら右にあるブランコを破壊。悪かったら左にあるシーソーを破壊」

「何を言ってますの？そんなこと誰がやるんですの？」

白井は闇に手を染めていなかったのでわからなかったが、美琴はわかっていた。これは上層部の決定で行われていると。

美琴の考えはある意味では正解だったが、もう１つの意味からすれば不正解だった。これは上層部の決定ではない。上層部は判断しただけ。それを実行するのは空気中の機械達だった。

バン！！と音がした。天草は右のブランコを見た。そこにあるのはただの木の破片と、砂だった。上層部の判断は『了解』とのことの合図らしい。

「了承が得られた。君達もここで晴れて『闇』の仲間入りだ」

「黒子は帰ってなさい。門限のことを寮監に伝えて来て頂戴」

「お姉さま！これは風紀委員に関する重大なことなのですわよ！それを見過ごせなどというには・・・」

「お願い黒子、本当に帰って頂戴」

美琴は白井にこの話を聞いてほしくなかった。聞いたらいつも上層部に狙われる身になるのだ。それは美琴と同じになってしまう。いつも自分のことが書庫（バンク）に登録されてしまう。書庫ならまだいい方かもしれない。美琴の場合、闇のデータベースに保管されてしまっているのだから。

「わ、わかりましたの。でも、後でちゃんと聞きますわよ」

「わかったわ、ありがと」

白井は虚空へ消えていった。彼女は空間移動を使ってこの場から消え去ったのだ。

「いいわ、聞かせなさい」

「では私の説明タイムの始まり始まり。私は今でも風紀委員委員長に戻ることが可能です。なぜなら風紀委員委員長の席はもともと私のためにある席だからなのです。あの席は私以外になることができません。理由はお察し下さい。これでわかりましたか？」

「わかったわよ。でもね、あの子は風紀委員委員長も目指して来たのよ。それを目標に頑張って来たのに・・・　アンタはそれを不可

能にしたのよ！！わかってるの！？」

「おやおや、勝負ではなかったんですか？脱線してしまいました」

「いいわよ、アンタ黒子の分まで倒してあげるから」

「それはそれは恐ろしい限りです」

しかし美琴の攻撃は一つも通らなかった。それを確認するまでもなく天草は、超能力者に開始１０秒というあまりにも差がありすぎる勝利を収めてしまった。

## 第5話（再）（後書き）

美琴が弱いのは仕方ありません。そうなるようにオリキャラを作ったんですので・・・今回の話は再美琴みたいな感じに仕上げたつもりです。風紀委員委員長このポストは原作でも見られなかったためオリジナルの設定を加えています。

質問、感想、ご指摘よろしくお願いします。

## 第６話（真実の会話）（前書き）

どうも観測者０９０６です。ここまで見て下さった方々本当にありがとうございます！！続きは本編にのっとってやって行きたいと思うので、ご支援よろしくお願いします。

## 第6話（真実の会話）

ここは第7学区のとある病院。つい先ほど、常盤台中学2年御坂美琴が入院した病院だった。彼女の容体は命に別条はないが、2週間の入院を必要とするほどひどい怪我だった。

美琴は重苦しい瞼を開け、辺りを見回した。そこには全く知らない絵や、冷蔵庫などが置いてあった。

しかし彼女は知らない。この病院に暗部の監視役のやつらが、交代制で見回りしていることを。そもそも、超能力者の入院はニュースになるくらい大ごとなのだ。それを上層部が監視しない訳がないのだ。

（あっ、私何やってたんだろ。っていうか負けたんだよね）

御坂美琴は天草政志に負けていた。美琴が撃った電撃は全てかわされ、天草の水が彼女の体をおもいきり叩いたのだ。叩くと言っても生半可なものではない。天草が手加減していなければ美琴は確実に死んでいた。超能力者（レベル5）が大能力者（レベル4）に手加減されて負けるというのは、果てしない侮辱ともとれるだろう。

「お姉さま！！大丈夫ですの！？」

「黒子、私は大丈夫だから」

「本当に大丈夫なんですの？それでは医者の方を呼んできますわね」

「ありがとう、黒子」

美琴は笑えていたのだろうか。自分自身では作り笑いを作ってい

たが上手く出来ている自信がない。彼女は輪の中心に立つ人物だ。それなりのカリスマ性は持っていた。
カツカツカツ、とそんな足音が聞こえてきた。音がして、彼女の病室の扉が開いた。そこに立っている人物は冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）と呼ばれる学園都市最高峰の医者であった。

「もう、喋れるのかな御坂君」

「ええまあ。ところで私の症状って何なんですか？」

「全身打撲と肋骨を1本折っているね。でも僕が治療したんだ2週間で治るよ」

「ありがとうございます・・・って2週間！？そんなに入院するんですか！？」

「そうだろう。肋骨を折っていてしかも全身打撲だ。外の医療技術では1カ月は入院しなくてはならないね。それに比べたらいいほうだろう」

「その間ずっとここで過ごすんですか？」

「そうさ。君は少し休養が必要だろう。どんなことにも限度っていうものがあるんだよ。それでだがね・・・」

そういった医者は白井を門限があるなどの理由をつけて帰らせてしまった。

「お姉さま、また明日お見舞いに来ますの。では」

彼女が病室を出た後、医者の様子が変化した。

「君は暗部を知っているね。この学園都市の暗部だよ」

「そんなこと話していいんですか！？先生の命も狙われますよ！！」

「心配しなくてもいい。僕は君よりももっと長く学園都市の闇ってやつを知っているからね。でだ、君は暗部の何を知りたい？」

「私は・・・天草っていう人のことが知りたいです。彼は何者なんですか？」

一瞬、背筋が凍るような感じが美琴にもわかった。ここまで知ればもう後はないぞ、と警告するかのように・・・

「彼は僕の患者でもあり、学園都市最初の能力者でもあるんだ」

「学園都市で最初の能力者ですか？？」

「そう、彼は世界で初めて人工的に能力を開発させられた人物なんだ。しかもその開発方法がとんでもなく恐ろしかったんだ。　まず脳の能力が発生すると思われる場所をくりぬくんだ。それで能力が開発出来たら成功。出来なかったら失敗。とね」

「能力の開発って暗記術や薬を投与して行うんじゃないですか？それなのになぜ？」

「学園都市も僕もまだまだ未熟だった。それゆえあのような方法でしか能力を開発することができなかったんだ。」

「それで、それだけなんですか？彼の正体って」

「今の能力者達は、自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を持っているから現象を起こすことができる。しかし彼はそれを持っていないのだよ。理由は分かっていないが私見としてはおそらく脳本体をいじくったことで、自分だけの現実とは違う現実を作ってしまったのだろう」

「で、でも同じ能力が開発出来たってことは私達と同じなんじゃないの？」

「それが違うんだ。君の能力を例えるといい。君は電子を1個レベルで操ることができるね。」

「はい」

彼女は頷く。医者の語りはまだまだ終わらなかった。

「彼も水分子を1個レベルまで操ることができるんだ。しかし、彼はそれを逆手にとって能力を使っていた。」

「どういう意味ですか？」

「水分子というのはH？Oというきわめて一般的な物質だ。しかし水というのはこのような気温では常に水になっている。氷や気体に変化せずにだ。どういうことだかわかるかい？」

「全く」

「彼の本質にあるのは、水を操る能力だ。君のように電子を操る能力に近いといっても過言ではない。電子は形を変えない。水分子も

形を変えない。だが彼は、水分子の酸素原子の配列まで変化させることに成功した。それを応用するととても固い水や、柔らかい氷など現実世界ではありえない現象が起こるのだ」

「それってどのくらいすごいことなんですか？」

いくら常盤台中学に通っていて、大学レベルの授業を受けていても価値観というのはわからないものである。

「ノーベル賞を2、3個はいけるね」

「ええ！？」

「大きい声は出さないでほしいな。他の患者さんに迷惑だよ。それと今日はもう寝なさい。寝る分だけ回復力がつくから」

美琴は頷くことしかできないほどに驚いていた。

美琴はベッドの上で横になっていた。時計の針は11時を回っていた。

（アイツそんなにすごい能力者だったんだ。でも、何で大能力者なのよ。水分子の配列を変えるほどの力があるんなら、超能力でも十分いけるはずなんだけどなあ）

そんなことに思いふけているうちに、睡魔に襲われ沈黙の世界へ沈んでいった。

＊＊＊

「ふっふふ～～～ん」

「おいおいインデックス、そんなに銭湯が好きなのか？」

「ジャパニーズの銭湯なんだよね！！それは面白くない訳ないよ！！」

「あ～～はいはい。」

彼らは学園都市にも数少ない銭湯に行こうとしていたが、

「対象は移動中ですよ。ステイル」

「そんなことわかってはいるさ。でもね、僕はあの少年がとても気になるんだ。僕の炎剣を何の術式もなく防いだんだよ？」

「学園都市の上層部にも連絡は入れてあります。しかし彼は何の能力も持たない一般人という報告が上がってきています」

「上が情報を隠ぺいしているとでも？」

「その可能性も十分にありうるでしょう」

このようなことをしているのは神崎火織(かんざきかおり)とステイル＝マグヌスであった。しかしこの仕事の会話も途中でぶつっ　っと途切れてしまうのであった。

「念のため人払いを使っておきましょう」

そういって準備する彼女だったが、彼女の手際に恐ろしい力が加わっていた・・・

## 第6話（真実の会話）（後書き）

すみません。こんな途中で切ってしまって。次回は神崎対天草にしたいと思ってます。

## 第７話（魔術師ＶＳ魔術師）（前書き）

前書きといっても、本当に話すことありません。最後まで見てくれればうれしいです。そろそろ、天草さんの紹介話を書こうと思ってます。

アンケートｔｉｍｅ　新キャラ出そうと思います。どんなのがいいと思いますか？意見があれば、感想などにお書き下さい。では。

（能力名とその内容も）

## 第７話（魔術師ＶＳ魔術師）

神崎に加わっていた力は恐ろしいぐらい強烈であった。彼女は聖人である。この世に２０人といない人間だ。その聖人でさえ、重いと感じる力であった。

一瞬の風絶音。それを合図にしたのか、神崎とステイルはその場を離れた。そこにあったビルには一人の男が立っていた。そう、天草政志であった。

「よう、神崎。元気にしてたか？」

「今のあなたとこのような会話をする義務はありません。こちらの質問に答えなさい。なぜあなたは私の邪魔をするんですか？」

神崎火織。彼女は天草式の女教皇（プリエステス）として活動してきていた。そして目の前にいる彼は、天草式の初代教皇の教えを受けてきた一番弟子だった。実力は神崎が聖人としての力を持っていなければ、圧倒的に天草が有利な状況にあった。しかし神崎の聖人としての力は強大であって、天草がかなう敵ではなかった。

「質問に答えよう。私はとある人物からの依頼で上条当麻を守っている。それで十分かね？」

「わかりました」

「火織。彼は一体どこの所属なんだ？そもそも魔術師なのか？」

「やあ、ステイル＝マグヌスさん。始めまして。私は天草政志というものです。」

「いいだろう。君は魔術を知っている身だね。こちらの名を名乗っておくよ。『Ｆｏｒｔｉｓ９３１　（我が名が最強である理由をここに証明する）』」

その時、彼の右手から炎剣が飛び出てきた。それは蛇のようは柔らかさと、数多の物を焼きつくしてきた色をしていた。これまでこの炎剣でどんなに敵を焼いてきたのだろう。それすらも考えさせないほどにステイルは速く動いた。そして炎剣を振り下ろす。周りの酸素をゴウ、という音が喰い尽す。

しかしそこに天草の姿はなかった。彼は炎剣を事前に察知し、水流移動（ウォータースクロール）で移動していたのだ。彼の持つ水流移動での速度は、時速７００？にも及ぶ。これを計算すると、０，１秒に１１ｍ移動することができるのだ。一番速いとされる動物、チーターでも秒速２４ｍ。どれくらい速いのかは予測出来るだろう。

「ふん、君は速いね。そこまで速かったらアスリートにでもなればいいんじゃないのかな？」

「生憎、こちらはドーピングしてるんでね。それは無理だね」

「ステイル！！やめなさい！！今のあなたの実力では不完全です！！」

「火織、誰に向かって言っているんだ？こんな奴聞いたこともないね。僕は実力のある者だっていくらでも焼いてきた。その自信はあるよ」

しかしこの自信はあっけなく砕かれることになった。

次のコンマ何秒の間にステイルはコンクリートにクレーターを作

り、失神していた。
天草の行ったことは至って単純なことだった。まず水流移動でスティルの懐まで潜り込む。その後に地下からくみ上げてきた水でスティルの全面を思いっ切り叩く。それをたった0，7秒でやった事だった。
「神崎、これでいいか？邪魔だったから一瞬で終わらせてやったけど」
「あなたって人はいつまでたっても変わらないものなんですね」
「そうかい。こっちも本気を出すから十分覚悟しとけや」
始めに動いたのは天草だった。彼はところどころに穴を開けていた。それは何を意味するのか全く分からない神崎であったが、天草が同じ場所に戻ってきて始めてわかった。
その穴から少量ではあるが水が流れていた。彼女は知っていた。天草政志という男は水の術式が得意だったことを。それは彼女が幼少のころから考えていたことだった。天草の水の術式を一度も逆算することができなかったのだ。同じ天草式の中でも彼の操る術式は逆算することができないことで有名だった。それゆえ、天草との紅白戦では常に体術で勝っていたのだ。
しかし天草もバカではない。体術で勝てなかった幼少の頃の弱点を能力で補ったのだ。水流操作（ウォーターコントロール）を使って、『暗闇の5月計画』に参加していた。これで得た彼の特権。一方通行（アクセラレータ）の自動防御機能だった。
「・・・七閃」
そう呟いた神崎の体からいくつものワイヤーが出てきた。それは

恐ろしいスピードで天草の体を貫いた。

（あなたは私の邪魔をしなければ良かったものの。天草式の教皇として天草式をまとめてくれればよかったんです。それなのに学園都市に来て魔術を失ってしまった・・・）

土埃が舞っていた。そのおかげで天草の遺体を見なくて済んだのは一種の救いかも知れなかった。が、

「勝手に自己満足しないで下さい。そして勝手に終わらせないで下さい」

「っ！！」

彼女は焦っていた。焦っていたのに冷静に判断することができた。

（何の術式を使ったのでしょう？しかし能力者が魔術を使うと体に怪我を負うはず。怪我を負ってまでこのワイヤーを止めたかったのでしょうか）

彼女の思惑は外れた。天草は怪我も負ってはいなかったし、術式も使っていなかった。唯一使ったのは能力だった。しかも、ワイヤーは切れていた。

「言っただろ。甘く見んなってな」

「一体何の術式を使ったのですか？あなたは水の術式にしか特化していなかったはずです。いくら水の術式でもワイヤーが切れることはありません。それに能力でも私には体術戦で負けるでしょう」

「なら、やってみるか」

そう言って彼は空中に飛んだ。それに応じたのか神崎も空中に飛んだ。そこで彼女は目を疑った。

そこには体の周りに液体を帯びた男の姿が映っていた。人間は酸素や食べ物を食べないと生きてはいけない。それはどんな人間でも同じことだ。神崎でさえそうである。しかし目の前にいる男は人間なのか？体の周りに液体を帯びれば空気は入って行かなくなる。たとえ空気を入れていたとしてもこの厚さでは１０秒程度で空気の入れ替えをしなくてはならない。

間をとって１０秒が経った。しかし一向に空気の入れ替えをしていない。これでは戦う前に死んでしまうのがオチだろう。

そこへ天草のとび蹴りが入っていった。神崎はギリギリで避けることに成功した。あの聖人がギリギリの範囲である。常人には見えない戦闘になってきていた。お互い魔術は使わない。魔術を使えば同じ天草式の術式なので逆算されてしまう恐れが出て来る。それを防ぐために魔術を使っていないのだ。しかしこれでは均衡状態が続きどちらも不利になってしまう。

ここで流れが変わった。　天草が動いた。彼は魔術師でもあるが大能力者でもあった。先程から穴を開けていた所から水が大量に溜まっていた。それも尋常じゃないほどの量だった。神崎は術式の逆算を始めていた。しかし彼女が知っている術式にはどれも当てはまらなかった。それもそのはずだろう。天草が使っているのは魔術ではなく能力であった。

「なぜ、体の周りを水でおおっているのですか？息ができなくなり死んでしまいますよ？」

「俺はこれでも死なねえんだよ。おぼえてろバカ」

（なら先に下水管の方を止めさせていただきましょう）

神崎は恐ろしいスピードで下水管に飛んでいった。そしてしっかり水を止めていたが、

またしても天草の攻防に劣りが出始めていた。

（おかしい。彼の術式は水に関するもの。水を止めれば大丈夫だと思ってはいたのですが・・・そう甘くはありませんか）

天草はまだ魔術を使っていない。だからこそ魔術の解析を行えなかった。

「神崎、お前魔術の解析を行っていてだろ。残念ながら魔術は使っていない。俺が使っているのは能力だ。学園都市の産物だろ？」

「そうでしたか。あなたは魔術を使っていなかったのですか。でしたら魔術を使う前に倒してさし上げましょう」

彼女は一撃で天草を抑えるべく禁忌の術式を使うことを決意する。それは『唯閃』聖人としての力を最大限引き出し、刀で攻撃する魔術。彼女はそれを使うことを躊躇（ためら）っていた。その魔術を使うことによって天草を死なせてしまう可能性があるからだ。しかし彼女は確信した。「天草は格段に強くなっている。唯閃を使用しても彼は死なない」そう思っていれば彼女は唯閃を使うことができる。

「唯閃！！」

彼女の柄から刀が抜き出される。その瞬間、力が爆発した。

天草は粉塵の中に隠れている。彼女は柄に刀をしまう。確信していた彼女だからこそ、ささいなミスを犯してしまった。それは次の

術式の準備を怠っていたことだった。しかし、いつもの彼女ならこのようなミスは決してしなかった。今の彼女は昔の仲間を殺害してしまった。そのように感じているのかもしれない。

「ステイル、起きていますか？」

「まあね、でも彼は一体誰なんだ？君の仲間か？」

「ステイル、彼は・・・」

「まあ、勝手に終わらせたのは最大のミスでしたね」

「煙から声が聞こえた。ステイルと神崎はものすごい速度で振り向き、神崎は『七閃』をステイルは炎剣をその場所に叩きこんでいた。しかし声は止まらない。

「この瞬間、貴様達の負けは確定した」

「なぜ、唯閃から逃れることができた？あれは聖人としてのパワーを最大限引き出したもの。それから逃れることなどできない！！」

ステイルは炎剣を3本まとめてぶつけた。しかし全て弾かれていた。

「聖人といっても神の力の数％。ただの人間にも到達できる地点ではあるんだよ」

その時ステイルと神崎の喉笛に水でできたレイピアの様な細い長剣の様なものが突き当たっていた。しかし彼らは諦めたりはしない。ステイルは炎剣を爆発させ大量の煙を作り目くらましにしてその場

脱出。神崎は聖人としての脚力で場から逃れた。

「七閃！！」

「俺に対して出し惜しみしてると、本当に負けるぞ？」

神崎の七閃を全て避け、反撃のレイピアを振るう。ステイルは攻撃をしていなかった。彼は、あらゆる所にルーンを貼っていた。

「魔女狩りの王（イノケンティウス）！！」

ステイルの最大の攻撃が振るわれた。魔女狩りの王はルーンの破壊を行わなければ消えない、ステイルご自慢の術式だった。

そんな幻想を天草は踏みつぶしてしまう。周りに貼られたルーン。それを彼の持つ能力水流操作で脱色してしまう。ルーンは脱色と染色で機能が分けられる。ステイルは炎による染色で効果を発揮していたが、天草はその色を水で落としてしまった。これによりルーンの効果は真逆になってしまい、魔女狩りの王は消え去ってしまう。

「そ、そんな・・・バカな・・・」

神崎は勝利に酔っている天草にとび蹴りを放つ。しかしその足はいとも簡単に掴まれてしまう。天草は勝利になど酔ってはいなかった。それは神崎を油断させるための作戦。そもそも彼の目的はステイル達を倒すことではなかった。

そしてレイピアを何十個も神崎の体に突きつける。それは地獄絵でみる針の山の様だった。

「もう逃げられないな」

「あなたの目的は何なんですか！？我々の目的に害をなすようなものなのですか！？答えなさい！！」

「今ならいいだろう。答えてやるさ。俺の目的は依頼主の目的。俺とは一切関係のないことさ。依頼主は・・・」

プルルルル、プルルルル、
タイミングを計ったかのように携帯の着信音が鳴った。天草は自分のポケットから折り畳み式の携帯電話を取り出す。

「もしもし？」

『作戦終了時刻、帰還可能、ｙｅｓ　ｏｒ　ｎｏ　？』

「ｙｅｓ」

天草は人払いを解き、神崎の目の前からいなくなっていた。

## 第７話（魔術師ＶＳ魔術師）（後書き）

遅くなって申し訳ございません！！！
偏頭痛で悩んでいたり、データの破壊があったりと大変だったんですが、よろしくおねがいします。

## 第８話（暗躍者）（前書き）

どうも、観測者０９０６です。今回も原作に沿った話で展開していきたいと思います。感想、指摘いろいろあれば言ってください。宜しくお願いします。

## 第8話（暗躍者）

暗躍者はどこの世界にもいる。この学園都市にでも『アイテム』などの暗部がいるのだ。しかし、彼らは悪いことをするだけの存在ではない。世界の平和を守ったり、テロリスト達から民間人を助けたりなど・・・

天草政志もその一員だった。彼はとある人物から依頼を受け、暗躍者として活動していた。今も彼は依頼主の依頼で仕事を行っていた。

それが終わり自宅に帰ろうとする天草だが、ある人間が自分の目の前にいきなり現れた。その人物は案内人と呼ばれていた。彼女の指示に従って一緒に行動していた。するといきなり空間移動（テレポート）した。天草は少々戸惑ったが、ほんの一瞬で世界が変わった。彼が見ているのは赤い液体が入った直径４ｍ、全長１０ｍを超す強化ガラスでできた円筒の器だった。周りには大量の光が無数に散らばっていた。さらにコードやケーブルなど様々なものが中央の円筒につながっていた。そこにいた人物こそ天草の依頼主、学園都市統括理事長アレイスター―であった。彼は人間として例えていいのか分からない状態にあった。その人間は聖人にも見え、囚人にも見える。寿命は１７００年を超えてしまうという人間としての限界を超えていた。

「で、今回の依頼はこれで良かったのか？アレイスター―？」

赤い液体、弱アルカリ性培養液に浸るアレイスター―は瞬き一つしないで答えた。

「今回はこれでいいだろう。しかし、君にはまだまだやってもらわなければいけないことがたくさんある」

「今回はって・・・『上条当麻を死なせない』今回の依頼はこれだけだが、まだ神崎やステイルは生きていたぞ。完全な依頼の完了はあいつらを殺すことに意味があるんじゃないか？」

「その通りなんだが君も知っているだろう。こちら（科学）の人間があちら（魔術）の人間を倒してはいけないことを」

「知ってはいるが、俺は能力者であり魔術師でもあるんだ。土御門と同じポジションにいる。しかし、アイツは魔術を失ってしまったからな。陰陽道の道を完全にマスターした陰陽博士だったのにな」

「彼には他の仕事が待っている。君にも仕事をしてもらうよ」

アレイスター―の言葉に意味がこもった。それは天草をまた戦場に駆り立てることを示している。

「上条当麻の護衛。それに付け加えてもう１つ。暗部の失敗者の回収、保管だ」

「場所は？」

天草は問いたださない。質問したところでアレイスター―は何も教えてはくれないことを熟知しているからだ。それに、たとえ教えてくれたとしてもその情報が嘘であることは間違いないことだからだ。

「第２３学区に専用の収容所を配備しておいた。そこを使ってくれて構わない。だが、万が一にも収容人が逃げた場合責任は君にとってもらうよ」

失敗したら事実上の死刑。それを意味していた。

「アレイスター。一つ聞いていいか？なぜお前は俺に固執する。他の人材なんて腐るほどいるだろう」

ビーカーの人間は女にも男にも聞こえる声でこう言った。

「君が私以外の初めてのホルスの人間だからだ」

天草は小萌の自宅前に来ていた。理由は上条当麻の護衛。上条に気付かれてもいいが、護衛していることだけは決して感づかれてはならないことが条件だった。

ドゴン！！

小萌宅のアパートの屋根が弾け飛んだ。そこからは天にも届きそうな光の柱が立っていた。

（アレイスター―はここまで予測していたのか・・・）

天草はアレイスター―はの命令でこの時間にここに訪れていた。依頼主の命令は絶対。従わない訳にもいかず、棒立ちしていた彼だが目に光が宿った。

「最ッ高だねえ！！どっかでアレイスター―は見ているんだろうけど、いい仕事を用意してくれたよ！！」

天草はまず人払いの結界を作った。こんな大惨事だ、ヤジウマがこないわけがない。

（上条の安全を最優先に考え、行動か・・・面倒くさいな。さっさと終わらせて帰るとするか）

しかし、天草の予想に反してアパートからの騒音はもう止まっていた。

その中では上条当麻は『死んだ』ことになっているのを天草は知らずに小萌のアパートに入っていく。

「おや、神崎？お前、もう終わったのか？」

「あ、天草！！あなたって人は何をしているんですか！？」

「神崎、落ち着け。禁書目録（インデックス）は無事だ。首輪が外れて自動書記（ヨハネのペン）は起動してはいない」

「なぜそこまで知っているんですか？」

「そうだ。僕たちでさえ知らない情報をそう容易く入手できるはずがない！！君はどこの所属なんだ！？」

魔術師2人は怒号の様な大声で問う。しかし、天草は答える気がないように無視して続ける。

「上条当麻は俺が回収していく。これは学園都市からの命令だ。お前達魔術師が絡んでくる場所じゃない」

「お前だって魔術師じゃないか！？」

「俺がいつどこで魔法名を名乗った？いつどこで魔術を使った？そ

れを証明できなければ俺はただの能力者だ」

自嘲気味に言った天草は小さな微笑みを浮かべていた。

「とりあえず回収はしていく。お前たちは堂々とここ、学園都市から出ていってくれ。　そうそう、手紙でも書くか？禁書目録を助けたお礼としてな」

そういって彼はとある大学病院を目指すのであった。

## 第8話（暗躍者）（後書き）

はい、内容が薄いです。勘弁して下さい。前回のは内容が濃すぎただけなんです。

原作を忠実に守ってみました。原作ブレイカーとはいわれたくはないので・・・

読んでくださってありがとうございました。

## 第9話（記憶の無くなった少年との関わり方）（前書き）

ここまで見て下さってありがとうございます。いままでこんな出来そこないの作品を見て下さって・・・

今回も原作に沿って進んで行きたいと思います。では、宜しくお願いします。

## 第9話（記憶の無くなった少年との関わり方）

上条当麻が気を失って3時間。とある大学病院で待っていた天草は電話に出ていた。

「上条当麻はどうなった方がいいんだ？」

無機質な声で返って来る返答。

『彼は多分、記憶を失っているはずだ。君の正体を知らせてもかまわない。だが、注意はしておけ。君の正体は高校の新任教務ということにしておいた。そこで通じるだろう』

「分かったよ。そこであのカエル医者と一緒に会えばいいのか？」

『そう言うことだ。しかし、あの医者には君の本当の姿を見せてはいけない。わかったか？』

ブツッ、っと電話を切った天草に丁度いいタイミングで手術室から医者が出てきた。そこへ彼は質問する。

「上条当麻の容体はどうなった？」

「君が第一発見者だったかな。事情を話すためにちょっとこっちに来てくれるかな」

医者は待合室に急ぐ。それについて行く天草は不思議なことを思っていた。

「君は彼に何をしたんだね？頭蓋骨を開けてスタンガンでも突っ込んだのかい？」

いたって冷静に、怪しまれないように答える天草。

「僕は彼が転んでいる所を発見しただけですよ。それがどうかしたんですか？」

「僕に嘘をついても無駄だよ。本当のことを言った方が身のためだ」

一気に不穏感が増す。しかし天草は淡々と答える。

「わかりました。彼はとある事故に遭いました。その内容は言えませんけど事故を起こしたんです。それが？」

「いつまでもしらを切っているのかね。まあいい、彼の容体を教えよう。彼は記憶喪失、というより記憶破壊になった。記憶は戻らない。しかし、それはエピソードの部分。知識はあっても思い出がないと言ったほうがいい」

「わかりました。それだけ分かれば安心です」

「君は一体何者なんだね？」

「彼の新任の教務です。それだけ分かれば本当に安心です」

天草は慣れない演技をしていたので顔の筋肉が引き攣っていた。痛いとは思わないが不愉快な思いがしただけだ。

「そうかい、彼は病室にいる。だが、面会は明日の９時過ぎからだ」

この日の夜は面倒なぐらい遅く感じていた・・・

面会時刻。最初に訪れていたのは担当医だった。上条の容体を彼に説明する。上条は少し不安げな表情を見せた。しかしスティルの書いた手紙を見て彼の眼は変わった。何かが宿ったような感じがした。

担当医が出ていった後、インデックスという少女が入っていった。彼女は何かが死んだような人間と出会った。しかしその人間は嘘だと言っていた。それに安堵したのか少女は少し潤んだ瞳から一滴の天然水が零れ落ちた。その少女は上条の頭に噛みついた。その後、インデックスという少女は病室から出ていってしまう。

そこに入っていったのは担当医。彼は上条の本当のことを告げる。告げると言うよりもう一度教えるというような感じであった。

担当医が出た後、彼の病室に入っていったのは天草政志だった。そこでの会話はインデックスという少女に聞かれていたら間違いなく彼女は壊れてしまうだろう。

「やあ、上条当麻君。君は今、何を感じているかね？」

「俺はいつもこんな感じですよ？」

上条は記憶があるふりをする。しかし、天草は安易な策を突破する。

「記憶を失っていることはわかる。お互い無駄なことは省こう。そこで、質問する。上条、君は今何を感じている？」

「そ、それは・・・　どうしていいのか分からないです」

上条の顔は曇っていた。記憶を失っている彼にとっては十分な答えだろう。なにせ上条は記憶を失っている。ステイルが書いた手紙だけを頼りに少女をかばったのだ。

「俺は、インデックスを守りたいです。どんなことがあっても、今の俺が救っていなくても、彼女の笑みだけは絶やしたくないです」

「いい判断だ。それでこそ上条当麻だ。今の上条当麻は昔の上条当麻と一緒だ」

天草は内心、こんな切れごとを言っていいのかわからなくなってた。

（あっちゃーーなんか俺いいこと言っちゃったみたいな感じだな。

俺、何にも関与してないのに・・・）

「それであなたは一体誰なんですか？」

上条の口が開く。

「俺は君の学校の新任教師、天草政志だ。よろしく。それと、君の第一発見者でもある」

「ああ、そうなんですか。ありがとうございます」

「上条もしっかり休んで夏休み明けには戻ってこいよ。後、記憶が無いことは誰にも話すんじゃないぞ」

「はい、わかりました」

帰り道、天草はアレイスター―からの新しい仕事内容の確認をすべく、第２３学区に移動していた。そこで彼の眼にはいったものは収容所。膨大な広さを持ってはいなかったが、そこそこの大きさは持っていた。その地下には１０階まであり、ＡＩＭジャマーや天草のやりやすいような設備が整っていた。それでも彼は喜ばない。いくら設備が整っていようとも、逃げる奴はとことん逃げるのだ。そして最終的には天草がその能力で倒すしかない。

（アレイスター―の奴め、こんな機能じゃ逃げられるばっかりじゃねえのかよ）

そんなことは口には出さない。口に出してしまえばアレイスター―に全て見つかってしまう。あのアレイスター―ならば、人の記憶にも侵入出来そうだが。

そんなことを思って彼はここに暮らし始める。今まで住んでいた学生寮は手放していた。自分が通っていた大学もない。交友関係はもとから築いていない。彼が持っているのは金と仕事だけだった。

## 第9話（記憶の無くなった少年との関わり方）（後書き）

今回も短いです。休日になればもっと長いのがかけるので少しばかり時間を下さい。

次は錬金術師編となります。内容は考え中ですけど頑張っていきたいと思います。皆さん宜しくお願いします。

## 第１０話（錬金術師の砦）（前書き）

どうも、今回も宜しくお願いします。基本、天草の立場は失敗者の回収ってことになってます。

## 第１０話（錬金術師の砦）

窓の無いビル。衝撃拡散性複合素材を使い、核の嵐にも耐えられるような設計になっている。その中にはエレベーターもなく一つの部屋しかなかった。そこにあるのは直径４メートル全長１０メートルにも及ぶ強化ガラスで出来た円筒だった。そして一切の明かりが無い。在るのは無数のランプ。それは田舎の星空の様な輝きを見せていた。

そして円筒の前に居るのはステイル＝マグヌス。彼は必要悪の教会（ネセサリウス）に属する人間だ。しかし、科学の総本場学園都市にいる。しかも学園都市統括理事会理事長の目の前にいる。彼は緊張していた。アレイスター―の姿に驚いてはいたが、彼が最も驚いたのはアレイスター―の精神の在りようだ。いくら生命維持装置が目の前にあっても、ステイルはそれに全てをまかせようとは思わない。しかし、アレイスター―は生命維持装置に全てをまかせている。いくら生命維持装置があっても所詮は機械だ。機械は誤作動を起こす危険性がある。そのような心配は彼には無いのだろうか。

『機械ができることを人間がする必要はないだろう』

「そのようですか」

『ここに来てもらったのは他でもない。君たちの領域（フィールド）の人間がここ、学園都市の一部を占拠してしまった』

「その目的は？」

『吸血殺し（ディープブラッド）』

アレイスターは淡々と答える。しかしこう説明する。

『しかし、その占拠した人間は吸血殺しに執着心はない。』

「といいますと？」

『占拠した魔術師は希少価値のある人間であればだれでもよかったらしい。それと、これが見取り図だ』

どこからか印刷された紙が２０枚程度出てきた。

「しかし、吸血殺しなどが本当に存在するんですか？」

『吸血殺しは基本できには君たちの領分だろう。こちらの人間はとある生物は全く認識していない』

とある生き物とは魔力が無限にある。ということは寿命が無いのだ。無限の魔力というのは魔術師にとっては夢でもあるだろう。

『君は、能力がなぜ発動するか分かるかい？』

「いえ、全く」

『それは、ただの認識のズレだ。能力者達は自分だけの現実を頭の中に置き、そこのミクロの世界で物質を変化させるのだ』

「それでも分かりません」

『それもそうだろう。これで分かっていたら君を処分せねばならない』

アレイスター―いわく、世界はミクロとマクロによって分かれているらしい。その分かれ目を調べるのも彼の目的である。
アレイスター―なんの操作をしたのか全く分からなかったが、ステイルの後ろに最初、一緒に来た能力者がいた。

『それと、私は君たちに対する切り札を持っている。それを増援として送ろう』

「しかし、彼は能力者ではないんですか？」

『あれは、そちらに対する有益な情報を持ってはいない』

「そうですか」

ステイル＝マグヌスは虚空へ消えていった。
その5分後同じ部屋に天草政志がいた。さっきのステイルの対応とは全く違っていた。その言葉は横暴で雑だった。

「アレイスター―！！今回の仕事は何だ！？呼び出しておいてくだらない仕事だったら俺は辞めるぞ！！」

『今回はステイル＝マグヌス、上条当麻の三沢塾への攻撃を観察。そして必要であれば補佐だ。しかし、見られてはならない。』

「でもよぉ、あそこに入っていくっていうことは、俺も魔術を使ったり能力を使ったりしなきゃいけないのか？」

『必要であればな。それと、ステイル＝マグヌスの依頼がある。彼は禁書目録（インデックス）の前に魔女狩りの王置（イノケンティウス）いて行くのだが、そこに敵が来る

かもしれない。そこで禁書目録を上条当麻の部屋にとどめておけ』

「様は子守りをしてろってことか？」

天草はそのような内容にも不満を洩らさなかった。しかし、子守と来た。天草は保育士の資格は持ってはいない。

『そうゆうことだ。では、行って来い』

天草の仕事が始まった。

ステイル＝マグヌスが上条の住んでいる寮にペタペタとルーンを貼っていた。しかし彼らは気付いていない。その２階上に天草が待っていた。

（早く終わんねえかなぁ・・・禁書目録の保護なんて結構難しそうだぞ）

上条宅前から彼らが出ていった。その瞬間を見計らって天草はベランダから２階下に飛び降りる。彼には何の一つの怪我もない。彼は水流操作（ウォーターコントロール）という能力を持っているため、全ての衝撃を水で受け流していた。

（おじゃましまーす・・・って！？魔女狩りの王が発動してるし！！）

ステイル達が気付く０，４秒前に天草は魔女狩りの王をなぎ倒す。それによってステイル達は気がつかない。

「こんにちは、宅急便です」

「な、なんなのかな！？」

インデックスはとても焦っていた。上条当麻が居ない時に人が訪れる機会はこれが初めてだった。

「上条当麻さんのお宅でよろしいでしょうか？こちらはピザフットです。ピザ１０人前ということだったので宅配に来ました」

「ピ、ピザ１０人前！！早く入るんだよ！！」

（こんな奴が禁書目録なのか？）

そう考えていた天草だがそのようなことを全く気にせずに中に入る。

「上条さんの伝言によりますと、『インデックスの食べ物を十分に用意してくれ。代金ならいくらでも払う。それとインデックス、アイスフロートの件は済まなかった。これで許してくれ』だそうです」

これは全くのウソだ。天草は大能力者なので実験金の金は大量に余っている。これぐらいあ朝飯前だ。

「ふん！とうまはいつも、このぐらい食べさせてくれればいいんだよ」

「それともう１つ。『インデックス、その人が俺が来る前に世話を見てくれる人だ。失礼のないようにするんだぞ』ということなので、上条様が戻ってこられるまでお世話させていただきます」

「うん！！で、このピザは食べていいのかな？」

「よろしいですとも。それと足りなくなったら私に申して下さい。他の物も用意させていただきます」

「ありがとうなんだよ！そしていただきます！！」

あんなにあったピザがほんの少しで空になる。

（嘘だろ・・・１万円分のピザがめちゃくちゃ早く無くなっていくだと・・・）

「モグモグ、ところであなたの名前はなんなのかな？」

「私でございましょうか？私は天草政志と申します」

「政志だね！！こんな食べ物ありがとうなんだよ！！」

天草はミスを犯してしまった。それは、偽名を使っていなかったことだ。禁書目録は完全記憶能力を持っている。いまさら、名前を変えても逆に怪しまれるばかりだ。

このようなミスを抱えたまま、仕事を進めることになった。

## 第１０話（錬金術師の砦）（後書き）

あとがき・・・書くことない、ということなので明日の分量を多くするために頑張って来ます。
誤字脱字、感想など待ってます。
見て下さってありがとうございます。

## 第１１話（知識の増幅）（前書き）

今回の内容は大幅に増やしていきたいと思います。駄文が多いと思いますがそこは勘弁して下さい。今回の内容で錬金術師編が終わると思います。それではご覧ください。

## 第１１話（知識の増幅）

天草政志は目の前の光景に呆然としていた。なぜなら、自分よりとても小さい少女が天草でも食べられない量のピザを食べていたのだ。この人間のどこにこんなに物が入るのだろう。

「おかわりを要求するんだよ！！」

しかも、完食。その光景はもはや、美しいと表現できそうだった。

天草はお代りに対して次々とオーダーを聞いていく。

「次は何がよろしいでしょうか？」

「日本の物が食べたいから・・・おすし！！おすしが食べたいんだよ！！」

天草は近くにある寿司屋に次々と注文を入れていく。その１０分間、インデックスという名の少女と天草は親睦を深めていく。

「あなたはとうまの一体何なのかな？」

「私でしょうか。私は上条当麻様に雇われた使用人でございます」

「でも、とうまはそんなにお金を持っていなかったよ？」

インデックスから疑問の声が上がる。それに対し、天草は難しい顔をしていた。

（上条当麻ってそんなに金無かったのかよ・・・どんな嘘をつけば

いいんだ）

心の中で苦戦する天草のもとに一種の救いが来た。

ピンポーン、

「宅配寿司屋です。ご注文を承って来ました」

（グッドタイミーング！！話す内容は後で考えるとして、今は気分の切り替えが重要！）

「はいっていいんだよ！！おすし、おすし」

インデックスは完全に天草のことを無視し寿司に夢中になっていた。そして、それを受け取ったインデックスは即座に喰らいつき始めた。

「代金は1万と2000円になります」

「ほいよ」

天草は財布から1万2000円を宅配者に渡し、家の鍵を閉めた。

「ところで、そんなに食べても良しいのでしょうか？」

「大丈夫なんだよ。それと、そんな敬語は辞めてほしいんだよ」

「わかったよ。俺としてもこっちの方がやりやすい」

天草は本題に入ろうとしていた。その内容は、天草が使う魔術、術式の強化だった。今までの彼では、ここから先幾度となく戦いが

待ちうけているだろう。今の彼では力が足りない。このままではいつかやられてしまう。そうならないための禁書目録の内容だ。

「本題の入っていいか？」

「本題ってなんのこと？」

「さっきお前が玄関から出た時に、ルーンを見つけたはずだ。それで大体内容は理解してあるはずだ」

「何でルーンのことを知っているの？もしかしてあなたは魔術師」

インデックスの警戒心が高まる。しかし、天草はそんなことは気にせずにどんどん話を続けていく。

「お前は必要悪の教会（ネセサリウス）の人間だ。だが、ここ学園都市に居候としてすんでいる。しかも、その居候相手は上条当麻。幻想殺し（イマジンブレイカー）だ。これは学園都市と必要悪の教会で定めた協定のギリギリの範囲に収まっている」

「私にここから出ていけっていいたいのかな」

「いや違う。ここから出て行きたくなければ勝手な行動をするなあ。そう言うことだ」

インデックスの表情に安堵が見られた。彼女はここに住んでいたいのだろう。しかし、天草は無理難題を突き付ける。

「それにもう１つ。お前の頭に入っている１０万３０００冊の魔導書の中から水に関する内容を俺に教えてほしい」

「だめ！！これはあなたが欲している物じゃない！！いくらなんでもそれだけは聞けないよ」

そこで、天草が倒れた。彼の体には気持ち悪い汗がびっとりと着いていた。

「あ、あはは・・・ああ・・・大丈夫。頭の内容は水に関するものだから・・・」

天草政志は原典を読んでしまった。読むと言うより盗み見したと言った方がいいのだろうか。しかし、彼の頭の中にはぎっしりと内容が詰まっていた。

（水神・・・北欧神話・・・神道術式・・・こんな真黒いもんがなんでこんな子に収まってんだよ・・・）

天草の頭の中には無数の原典の文字列が並んでいた。一冊でも読んでしまえば即、廃人。こんな世界の理を変えるものを読み込んだのだ。ただで済むはずがない。

「大丈夫！？早くそれを忘れて！！そうしないとあなたは壊れてしまう！！」

インデックスの制止を聞かない天草は、それでも解析を進める。

（ポセイドン・・・くそ、これ以上は難しいか。しかし、諦めはしねえ！！）

インデックスは自分の頭の中を盗み見られているのを防ごうとす

るが、なんの効果もなかった。

「インデックス・・・お前は三沢塾に行くつもりなんだろう？」

彼女はステイルの魔力を追って三沢塾のある場所に行こうとしていた。でも、彼女はすぐには行こうとはしなかった。なぜなら、天草がいたからだ。

「三沢塾はどのような術式や結界があるのかわからん。だが、お前の頭でも理解できない部分があるだろう。そこには決して近づくな」

「どうするの？君はここにいるのかな？」

「おれは・・・」

その瞬間、インデックスの目の前がゴミの塊になっていた。天草はインデックスが心配する直後に水流操作を使って窓から飛び降りていた。それでも彼の頭の中は原典に支配されそうだった。

（何とかアイツの前から逃げてはきたが、一度休憩が必要だな）

そう思った彼は、近くのハンバーガー屋に寄った。しかしそこは満席。なぜなら今は夏真っ盛り。こんなクーラーの効いた所には誰も出たくはないだろう。

「ここはダメだな。他の場所に移動するしかないか・・・」

天草政志が行った場所、それは個室サロン。監視の目は付いているが誰にも邪魔されずに休める場所の一つでもある。天草はその場所に移動しようとしていた。

窓の無いビルに住んでいるアレイスターは少しだけ不穏に思っていた。

『天草政志は禁書目録の知識を奪ったか。しかし、彼はホルスの人間だ。禁書目録の知識では彼にとって不十分だろう。だが、これを乗り越えれば彼は私に近づくことができるのかもしれないな』

アレイスターは不気味に笑っていた。面白可笑しく笑うのではな

く、ただただ笑っていた。そこに気持ち悪いと思わない人間はいないだろう。それでも彼は笑っていた。

スティルと上条は三沢塾の裏の世界で謎の球体に対して上条は、幻想殺し（イマジンブレイカー）を振るおうとしていた。そこでの上条は記憶にはない、しかし知識にはある現実を突きつけられる。

『能力者に魔術は使えない。それは才能のない人間が才能のある人間に追いつくために作りだされたのが魔術』

上条の目の前の少女の体が一部爆発した。そこの動脈から大量に見える血液が流れ出した。そこに現れたのが吸血殺し（ディープブラッド）だ。彼女と上条は少女を助け出した。しかし、悲劇はそこ

では終わらなかった。その少女は、突然現れた人間に一瞬で黄金になった。本当に一瞬だった。しかも、純金。そのような物質はどこにも存在していないのに、突然生み出された。

「瞬間練金（リメンマグナ）！！」

せっかく助けた目の前の少女が一瞬で黄金になってしまった。

そので上条の何かが砕けた。

## 第１１話（知識の増幅）（後書き）

なんか、最初の方で終わるとかほざいてた奴がいたなぁ・・・

結局、終わりませんでした！！

## 第１２話（錬金術師との決着）（前書き）

なんか、更新速度遅くなってきたので速度上げようと思いますが・・・受験勉強しなきゃいけなくなっちゃった（；｜；）

という訳で、早く科学の方に行きたいのですが、いけない。更新速度は変わらずに行きたいと思いますが、落ちたらすみません。

## 第１２話（錬金術師との決着）

上条が救った少女が瞬間錬金（リメンマグナ）によって黄金化されてしまった。上条にはさっぱり瞬間錬金の理屈は分からない。だが、彼の何かが切れた。

そこにアウレオルス＝ダミーがやって来た。しかし、彼の片腕と片足が金に化していた。

「材料！！大量の材料があれば、あの魔術師にもかなうはずだ！！」

発狂にも似たおぞましい感情をあらわに上条に近づいてくる。そして瞬間錬金を放ち、他の倒れている人間をも黄金と化していった。

上条にはそれが許せることとは断じて思わない。そして彼にも飛んできた小道具を幻想殺し（イマジンブレイカー）であっさりと打ち砕く。

「俄然？なぜ貴様は我が瞬間錬金を受けても黄金とならんのだ？」

「ごちゃごちゃ、うるせえんだよ！！」

「何故？そうか、その右手に人体の神秘が隠されているのだな。ならば、貴様を解体し新たな発見を眼にして見せようぞ」

上条は相手の話など聞いてはいなかった。彼はただ単純に怒っていた。そして、彼はアウレオルス＝ダミーの元へ歩いてゆく。それはもう、檻から出た猛獣の様だった。眼には光が籠っていない。アウレオルス＝ダミーのことを、獲物としてしか見ていないのだろう。

上条の猛攻が始まる。彼は目の前に黄金の水たまりがあった。アウレオルス＝ダミーと上条の間に役２ｍ程度、走って飛ぶには十分

だったが、今の上条は走っていない。アウレオルス＝ダミーは、安全だと考えた。いくら瞬間練金を防げたとしても、それは右手のみ。そこ以外の場所に黄金をぶち当てれば、確実に黄金と化すと思っていたからだ。

しかし、その幻想は儚(はかな)く消えてしまう。上条は水たまりを飛び越えていた。怒りが彼の身体能力を上げたのだろうか。そして、アウレオルス＝ダミーの体にしがみつく。このような至近距離では瞬間練金を撃つことはできない。たとえ撃ったとしても、自分に黄金が跳ね返ってくるだけだ。

そこで肉弾戦になった。上条はマウントをとって、ひたすら殴り続けた。何十発か殴った後、彼はいきなり冷水を浴びたかのように冷静になっていた。その理由は、アウレオルス＝ダミーの顔だ。

死にたくない・・・苦しみたくない・・・この痛みを消してほしい・・・

あらゆる負の感情を上条は与えていた。

「イ、　イギ、や、やめてくれ・・・」

上条は自分のしたことを悔やんだんのかもしれない。

そこで、アウレオルス＝ダミーは逃げ出した。

「まだ、我を殺し足りんか」

「いや、その逆だね。君を楽にしてあげよう」

ステイルはあくまでも、神父だ。迷っている子羊に対して、手を差し伸べる側だ。

「貴様は悪魔なのか天使なのかどっちだ」

科学者というのは謎があれば解明する、そのような人間だ。しかし、謎が目の前にあるのにそれをただただ見て死んでいくというのは、とても報われない。

「神父として祈りを歌ってあげよう」

「歌うな、魔術師風情が」

その言葉を最後に、アウレオルス＝ダミーは焼け炭になっていった。

とある個室サロンの人間。

（湖の乙女・・・この術式が今、一番使い勝手がいいか。よし、試してみるか！！）

湖の乙女とは『アーサー王の死』で出てきた女性である。彼女はアーサー王に対し、新しい剣エクスカリバーを渡している。そして、中世伝説で名高いマーリンが恋をした人物でもある。マーリンは中世の魔法使いだった。彼は恋をした湖の乙女に対し、自分の魔法を全て教えてしまう。しかし、湖の乙女はそのマーリンを湖に幽閉し

殺した。
この伝説から生み出された術式が『湖の乙女（ヤングガールオブザレイク）』だ。この術式は湖の乙女は最初持っていたエクスカリバーと後半知った魔法がある。術式上では、エクスカリバーの剣術か、マーリンの強力な魔法、どちらかを選んで使いこなす術式だった。

（頭も回復してきたことだし、いっちょ頑張りますか！）

そして彼も、戦火の火種となっているあの場所に足を踏み入れることとなった。

天草は三沢塾の中にいた。彼はコインの裏の世界にいた。

（誰もいないのかよ・・・この要塞、ぜってーピラミッドだな。もう、逃げらんねーようにしてあるし）

天草が階段を上がって上の階に着いた時、会話が聞こえた。普通の会話ではない、それは片方の人間が壊れているような話し方だった。その違いは一般人にはわからないのかもしれないが、天草にはわかっている。このような人間は冷静に判断することができない。戦闘に参加するのなら今が絶好のチャンスだと。

しかし、壁から少しのぞいただけで世界が変わった。壊れている人格の人間が圧倒的な優位にいた。保護対象の上条は床に倒されていた。

（おいおい、この状況でどうやって勝とうというのだね）

それでも、参加しなければ上条は守れない。上条の保護を最優先にし、まっすぐ突き進む。

「そこにいる人間も倒れ伏せ！！」

天草が気付かれた、と思ったよりも早く彼の体が反応した。天草体が床にピッタリとくっついていた。

「何故ばれたし？」

天草は流れをこちらに寄せるべく、会話を行う。

「今の足音でばれていたのだ。貴様ら！！他に仲間はいないのか！？」

「あ、天草先生！！どうしてここにいるんですか！？」

「何故お前がここにいる天草！！」

「さっき私にご飯をくれた人だ！」

3人とも顔見知りがいた。

（え、嘘でしょ・・・なんで、俺の知り合いがこんなにいるわけ？）

天草が疑問に思っていたが、相手の攻撃の方が速かった。

「邪魔だ、女。死ね」

そう、アウレオルス＝イザードが言葉を放つと吸血殺しは魂が抜けたかのように倒れた。しかし、上条の右手、幻想殺しが触れた瞬間、彼女は息を吹き返した。

そして、ここから錬金術師と素人の戦いが始まる。

## 第１２話（錬金術師との決着）（後書き）

なんか、タイトルに決着とかほざいてるけど、決着つかなかったね・・・

もう、ほんとに何とかして下さい！！錬金術師編でこんなに使うとは思わなかったので。

見て下さってありがとうございます！！

## 第１３話（錬金術師の手に入れたもの）（前書き）

どうも、観測者０９０６です。これまで見て下さった方々ありがとうございます。今回でやっと錬金術師編が終わります。次は、一方通行編♪楽しみだなあ。科学と魔術って言ったら、科学の方が考えやすいから・・・

では、お楽しみください。

## 第１３話（錬金術師の手に入れたもの）

「窒息せよ」

アウレオルス＝イザードは宣言する。アウレオルス＝イザードはある術式を完成させていた。それは、どの錬金術師も目的とする物、『世界の全てを頭の中でシュミレートする』ということだった。

シュミレートだけならまだいい。しかし、魔術では、頭の中の現実を本物の現実に引っ張り出すことは意外と安易な物なのだ。しかし、その世界の法則が一つでも狂っていれば、その現実は成り立たない。

ッガ！！と、上条の首元に空気が入ってこなかった。そこで、上条は自分の首に右手を当てた。そうすると、普通に呼吸ができていた。

（こいつは俺の右手で消せる！！冷静に対処すれば消せる！！）

「感電死」

突然、上条の目の前に大量のスパークが飛び出していた。彼はとっさに右手を出した。計算して出したのではない。彼の右手を避雷針として対応していた。

「その右手、我が金色の練成を打ち砕いただと？おもしろい。ならばこれはどうだ」

アウレオルス＝イザードは瞬間的に判断し、呟く。

「銃をこの手に、銃弾は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分」

次々と答えていく。

「人間の動体視力を越える速度にて、射出を開始せよ」

どんどん答えていて、刻々と上条の死へのタイムリミットが近づいてくる。

「準備は万端。十の暗器銃。同時射出を開始せよ」

「あぶねェ！！どけろ、上条！！」

天草は叫びながら、上条の前に水で出来た壁を用意する。その水の壁にぶち当たった魔弾は、粉々に砕けていた。

「先に貴様を殺そうか」

「やれるもんなら、やってみやがれってんだョ」

「ならば、死ね」

アウレオルス＝イザードが口に出した瞬間、天草は死ぬはずだった。しかし、天草はいまだに息をしていた。

「何故、我の言葉に反しているのだ」

「いいことを教えてやる。貴様は自分の頭の中でシュミレートすることによってそれを現実に引っ張り出す。しかし、それは完全なシュミレートだからだ。それに、反して動けばシュミレートは崩れる。

それが、その術式といっていいのか分からんが、錬金術の最高峰の盲点だ」

「ふはははは！！そのようなことあるわけがない！そのようなことは、あってはならないのだ！！」

しかし、天草は淡々と物事を進めていく。それは、マジックを見破った時の壮快感にも似ていた。それに酔って叫ぶ一人の人間、天草政志。

「じゃあ、何で俺は死んでいない？それを証明することができれば貴様の勝ちだな」

「これで最後だ、死ね」

これで死ななければ天草の勝利宣言、これで死ねばアウレオルス＝イザードが勝利することを意味する。

しかし、どちらとも無かった。上条がその戦闘に乱入し、アウレオルス＝イザードを殴っていた。

「お前、俺の先生に手をだすんじゃねえ！！」

上条は記憶を失っている。天草から先生と教えてもらっただけで、それを信じていた。

「貴様！！その右手、その右手に力が集まっているのか。ならばよろしい。その右手からそぎ落としてやろう」

そういうアウレオルス＝イザードはポケットから針を出し、自分の首に突き刺す。

「上条当麻！！奴の弱点はその針だ。針に注意して攻撃するんだ」
ステイルは床に張り付いたまま叫ぶ。
「ルーンの魔術師、貴様から殺してやろう。宙を舞え、ロンドンの神父よ。そして弾けよ」
そう言った瞬間、ステイルの体が内側から風船の様なパン、という音を立ててばらばらになる。
上条は考える。（さっきのステイルの言ったことは何だったのか？針が弱点とは一体どう言うことなのか？針が弱点としても一体どのような方法で攻めればいいのか？）
「さあ、始めようか。その不可解な右手。そぎ落として見せよう」
上条はまだ考える。しかし、戦いは待ってはくれない。
「魔弾装填。準部完了。発射速度は先ほどと同じ」
「相手は俺がしてやるぜェ錬金術師！！」
天草はアイコンタクトで上条にメッセージを送る。
『考えろ！お前の右手は勝てる力を持っている』
「貴様の対処法はもう、考えてある。その勝負、受けて立とうではないか」
天草は先ほど覚えたばかりの術式を発動する。その術式は、原典

の物であるため脳や体のあらゆる部分に深く傷を与えてしまう。しかし、それでも術式の発動を天草はやめない。

「湖の乙女！！出てこい。貴様の力を我に与えよ！！Ｙｏｕｎｇ ｇｉｒｌ ｏｆ ｔｈｅ ｌａｋｅ！！ Ｆｏｒ ｓｗｏｒｄ！！」

その怒号が聞こえた次の瞬間、天草の背後に水で出来た女性が出てきた。

『汝の望みは何か？刀か？魔術か？どちらだ？』

「刀だ！」

『よろしい、それ相応の対価を私は貰おう』

その一連の会話が終わった。そうしたら、天草の右手に日本刀のようなものが掴まれてあった。

「こい、アウレオルス＝イザード。貴様はここで負け組となる」

「いいだろう。射出用意・・・開始！！」

普通の動体視力では見えないが一秒に何十本の魔弾でできたソードが飛んできた。

しかし、天草はそのすべてを日本刀で破壊、もしくは体ギリギリのラインで避けていた。

「ふん、いい動きをしているな」

「これは、紅朱刀（べにしゅとう）。湖の乙女が用意してくれた一品だ。敵に対して

最適刀を用意してくれたんだ」

「それがどうした。我の目標はそこにあるのではない」

そう叫んだアウレオルス＝イザードは振り向き、上条の方を向いて魔弾を射出した。その瞬間、上条の右手が驚くほどきれいにさっぱり切断された

それでも上条のほほ笑みは崩れない。彼の持っている唯一の能力が取られたのだ。

「お前、俺の幻想殺しを右手を切っただけで無くせると思ってたのか？」

「ば、バカな・・・貴様の右手は切断された。まま、まさかあの時と同じように生き返るのか」

そう呟いた時にはもう、遅かった。

目の前にはステイル＝マグヌスの姿がある。

「う、嘘だ。こんなはずではない。まさか、この不安がいけないのか。そうだ、この不安さえ払拭出来ればいいのだ」

アウレオルス＝イザードはポケットから針を取りだすが手が震え、思うように取り出すことができなかった。

カランカラン、と音がし針が床にばらまかれた。

「まだだ、まだ、終わってはいない」

「テメエの幻想は、はなっから終わってたんだよ」

そうアウレオルス＝イザードにいった上条の右手には龍の顎になっていた。

「テメエのその幻想をぶち殺す」

## 第１３話（錬金術師の手に入れたもの）（後書き）

なんか、何話っていうあとのかっこの所が、だんだん適当になってきた。

後これ重要です。

受験勉強に入るので、週４回の更新を目標にしていきたいと思います。

ありがとうございました。

## 第１４話（保護管理局）（前書き）

どうも、ってか　最近こんなことしか呟いていないんだけど・・・
悪役を作るのはちょっと難しい感じがしたなって、ふけってました。
では、行きます。日常編ということにしておきます。

## 第１４話（保護管理局）

上条当麻は気を失っていた。右肩から腕がさっぱり無くなっている。そこで、今まで気が持っていたことが不思議だろう。インデックスという少女はまだ気絶している。

「ステイル＝マグヌス。お前はこれからどうする？こいつらを連れて病院でもいくか？それとも、帰るか？」

「僕はアウレオルス＝イザードの顔を焼きつくして治癒でもするよ。彼はもう、賞金レベルだからね」

「そうか、それが終わったらこいつらを連れて病院へ行ってくれ。アウレオルス＝イザードはその作業が終わったら俺が貰っていくぞ」

ステイルは驚いた顔をする。それに比べて天草は平然を装う。装うというよりも、これが彼の自然体なのだろう。

「ダメだ！これは魔術師が関係している出来事なんだ。君に対処できる物じゃない」

「残念ながらもう、許可は取ってある。これはイギリス聖教からの直々の紙切れだ」

そう言って投げ出された紙を、ステイルはアウレオルス＝イザードの顔を焼きながら書面を見る。

「これは・・・本物だ。最大主教（アークビショップ）は何を考えているんだ！？」

「という訳で、今回のアウレオルス＝イザードは俺が貰っていく。拒否権はない」

アウレオルス＝イザードの顔の治癒が終了し、ステイルは上条の体を担ぎインデックスを優しく抱き、出ていった。

「なんだかんだで、こいつを連れていくか」

そんなつぶやきと共に三沢塾の窓から出ていく。

天草政志は電話をしながらアウレオルス＝イザードを担ぎ、歩いていた。

「おい、上条当麻の右肩からでたあの龍の顎は一体何だ？」

電話の主は考えていたスピーチを答えるように、淡々と答える。

『それは自分で考えた方がいいだろう。それと君が担いでいる人間は、保護管理局第９０１に入れておけ。そこならばそいつも出られまい』

「本当にいいのか？こいつは現実を思うがままに変えることができるんだぞ。それにそんなに部屋あんのか」

『そこには約１０００の部屋がある。大丈夫だ、問題ない』

そんな会話をしている間に天草は、もう第２３学区の保護管理局に着いていた。第２３学区には空港や軍事施設などが置いてある。保護管理局は空港で入国出来なかった人間を泊めておくための施設だった。

しかし、それは建前。本当は軍事施設、といっても武器や戦闘機があるのではない。拷問施設となっているのだ。拷問だが、アニメや漫画に出て来る暴力の拷問ではない。ここは学園都市だ。相手に薬を飲ませて、脳波でも測定すれば情報はいくらでも入る。ただそれだけの施設なのだ。しかし、それもまた建前。本来は天草政志専用に作られた管理局。管理局といっても、ほとんど天草政志の部屋。１０００の部屋の内、１００ほど天草の部屋なのだ。それ以外は囚人部屋。それも対能力者と対魔術師用の二つを持っている。ここから出られた人間など、存在するのかどうかも怪しい。

「アレイスター、本当にこんな部屋使うのか？そこらへんのホテルより豪華だぞ」

『それは、その人間に対して最も適したものが必要だからな』

「そら、そうか」

天草政志は９０１室に着いていた。その部屋はシャンデリアや絵画など、豪華なものが大量にあった。それは成金野郎が一括して買ったような物だった。

ドン、と音を立てて、アウレオルス＝イザードを適当に放り投げていた。

「これで作業終了。今回の依頼料何円だっけ？」

『６００万だ。これで十分でなっかた場合は私に言え』

「了解いっと。話変わるけど、上条の見舞いって行っていいのか？」

『それはだな・・・フム、行ってもいいだろう。だが、龍の顎については言及してはならない』

天草は携帯の電源を切って、部屋の鍵を閉めた。この部屋の鍵は乱数使用で、暗号を解くには相当の時間がかかるらしい。

そんなことも気にせずに、上条の病室へ急いだ。

「あ、・・・超電磁砲（レールガン）・・・」

天草が途中で会ったのは御坂美琴。学園都市の超能力者で、第３位の実力を持っている。

「あんた、天草政志でしょ。こっちは名前まで調べたんだから」

美琴は名前が合っていると言うだけで、勝ち誇ったような行動をしていた。

「名前は合っているけど、それがなんだよ？また勝負でも使用ってのか。こんな夜９時頃に？」

「そうじゃないわ。アンタ、うちの黒子の夢を壊してくれたじゃない。ほら、あの子風紀委員長に立候補する予定だったのよ。でも、アンタがその夢を壊してくれたおかげでかなり落ち込んでいたわ。何で、あんたみたいなのが風紀委員長なのよ？」

天草は自分より頭の悪い人間や、脳の無い人間に対してはやっつけ気味の態度を取る性格だった。

「教えることは何もない。教えたとしても何の意味を持たない」

「あら、それは心外だわ。私だって、そんなお子様ではないわ。例えば、暗闇の５月計画。それ以外にも知っているわ」

天草政志のトラウマが蘇る。彼が感じたあの時の痛みは、誰とも

比較出来ないだろう。出来たとしても、その痛みを受けている人間はとっくに死んでいる。

「それだけか。そういうお前こそあれだろ？さっきは研究所３つ壊してきましたーーっていう奴だろ？」

美琴は体中に汗がびっとりとこびり付いていた。

「そんな確信、在るのかしら？そんな証拠もないのに」

「証拠ならここにあるさ」

そう天草が美琴に投げだしたのは、一枚の写真だった。それは先ほど、アレイスターから追加の情報量として貰って来たものだった。

「お前の行動ぐらい、こっちは把握してんだよ」

「そ、そんなこと言っても、私を逮捕するのかしら？」

「そんなことはしない。ただ、忠告をしにきただけだ。これ以上の実験阻止は無意味だ。これ以上やっても、何の成果も上げられないままクローン達は死んでゆく。一方通行（アクセラレータ）の手によってな」

これ以上の発言をしないまま、天草政志は病院へと駆け出していく。

## 第１４話（保護管理局）（後書き）

受験勉強・・・

天草政志の身体能力パねェ！！

## 第１５話（通院）（前書き）

土日の更新は続けていくつもりです。
今回から3巻の内容に入っていくつもりです。（途中で途切れるかもしれないけど・・・）そんな、こんなで進んでいきます。

## 第１５話（通院）

夜の道を駆ける天草。彼の目指す場所は１つ。誰もたらい回しにしない病院。天草は事前に自分の身分の設定を行っていた。

「えっと、天草政志。学園都市高等学校教務、歳は・・・２４？俺は２１何だけどなぁ・・・」

そんなことを言っている間に、病院へ着いてしまう。天草は自分の靴の裏に水を貼り付け、摩擦をなるべく少なくし走行していた。その速度は、およそ時速１００キロ。しかし、これが彼の限界ではない。彼は交通事故を起こさない程度でありながら、さらに最高速度を叩きだしていた。

「また、君の連れかな」

カエルの様な顔をした医師がやって来る。彼は、天草がここに来ることを事前に知っていたかのように落ち着いていた。

「よお、アイツの様子はどうだ？」

「あんなに綺麗に右腕を切られているとは、一体何が合ったんだ？」

「大したことじゃない。それよりも、いつもの薬、２００日分くれ。足りなくなった」

天草がいういつもの薬とは、彼は脳の一部を削り取って出来た能力者だ。脳の一部を取ってしまうということは、何らかの障害を受けることになる。天草が受けた障害は、前頭葉の障害。彼は一時的

の人格がパズルのように壊れてしまったのだ。
それを何日ものリハビリによって回復したが、前頭葉の働きを補う薬を毎日飲まなければならなかった。
「２００日って、君はまた旅でもするのかい」
「そんなとこだ。上条の右腕はくっついたのか？」
「大丈夫だ。僕を何だと思っている」
「そうか、それなら安心した」
天草は上条のいる病室へ行こうとしたが医師が立ちはだかった。
「まだ面会は無理だよ。というより本当の事情を話してほしいな」
「そんなこと、アレイスター―にでも聞いてくりゃいいだろ？アイツの生命維持装置を作ったのはお前なんだから」
「彼から話を聞くなら、君の方がいいと思ってね」
しかし、天草は黙ったまま動かない。
「無理だ。これは俺から言っていいものなのかどうかわからない。それに、上条の方が心配だしな」
「そうか・・・なら仕方がない。面会は明日になってからだよ」
「なら、また明日来るよ」

彼の仕事はまだまだ続いていく。

翌日。天草は病室ではなく学園都市統括理事会の会議に混ざっていた。会議に混ざるといっても、同じ場所にいるのではない。全員の映像がまとまった部屋に置いてあるだけだ。

天草は統括理事会において発言権を持っていた。それは、統括理事会のメンバーに加え警備員（アンチスキル）の代表。暗部のトップ。そして風紀委員委員長としての立場だった。

そこで提案者となっている人物が口を開く。

「では、皆さん。資料の３２ページを見て下さい。そこにいるのが今、学園都市で最もレベル６に近い人間、一方通行（アクセラレータ）です。彼は以前からの実験の対象者となってもらっています。後、数か月でレベル６に行くでしょう。しかし、今の予算では辿りつけません。そこで、統括理事会の皆さんから研究費の増加の許可を頂きたいのです」

（一方通行ねぇ・・・俺の実験の張本人が今も実験しているとは）

統括理事会のメンバーからは異論は出なかった。しかし、あくまでも黙認。という結果で追加の予算が下りた。
統括理事会のメンバーが続々と通信を切っていく間に、天草は提案者に質問する。

「おい、ちょっと待て。一方通行の能力は何だ？答えろ」

「彼の能力はあらゆるベクトルを操ることができます。熱量、重力、運動量、様々なベクトルを操れることができます」

「質問するけどよ、そいつを倒す方法ってのはあんのか？」

提案者はとまどったような顔をしてこう答えた。

「それはわかりませんが、木原印ならわかるかと・・・」

「よし、そいつに連絡して俺と会話させろ。いいな」

ドスの効いた声で天草は脅す。その2分もしない間に電話はつながった。

「もしもし、木原ですけど」

木原数多。一方通行の能力開発に深くかかわった人物。彼は優秀な科学者なので、電話に出ることなどそうそうありえない。しかし、今回は統括理事会の御司令ということで出てきたわけだ。

「俺の名前は天草だ。一方通行の能力開発にかかわった人間なら、アイツの弱点ぐらい知っているだろう。言え」

「おいおい、何様なんだよ。教えてほしい時はちゃんとした敬語で言えよ」

天草は彼の言動に腹を立て、思いっ切り叫んだ。

「おい、テメエの居場所はわかってんだ。今から殺しに行ってもいいんだぞ」

深い闇に関わった人間ならば、このオーラは感じとれているはずだ。そこで、木原は納得したかのように答えた。

「アイツの反射する範囲は体から数ミリの所だ。その膜、ギリギリまで近づいてから弾き戻すとそれを反射して一方通行に当たっていく。これでいいか？」

「上出来だ。最初っからこんな感じで言えばいいのによ」

天草はやっとの思いで会議から抜け出せた。そして、上条のいる病院に進むのであった。

コンコン、と軽い音を立てるドアを開くとそこには上条当麻とインデックという翔じゃがいた。

「元気そうだな。ほれ、お見舞いの品だ」

無造作に投げられた高級そうなクッキーの缶を、上条は慌てたそぶりでキャッチする。

「すみません。先生がこんなものくれて」

「いいってことよ。それに、金なら心配すんな。医療費の方は全額、俺が払ってやるからな」

「そこまでしなくてもいいですよ。俺が自分で払いますから」

そんな他愛もない会話の中に一つの異物を投げ込む少女・・・

「あの時は大丈夫だったのかな」

インデックス。

「おい、インデックス。先生と知り合いなのか？」

「知り合いとは言えないけど、この人魔術師なんじゃないの、とうま？」

「え・・・本当なんですか、先生！？」

病院なのに荒々しい声を上げる上条。

「魔術師とは言ってないよ」

焦る天草だが、上条のボディガードをしていることに気がつかない上条当麻とインデックスであった。

「でも、わたしの頭の中の魔導書、かってに読んだもん」

「そういやぁ、あんまり覚えてないけど先生、魔術使ってたかも」

「ねえ、どんな魔術使ったの！？教えてとうま！！」

「わかったわかった。だから焦るんじゃありません。確か・・・『湖の乙女』っていうものだったかな？」

「まさし！！まさか本当にあの術式を使ったんだね！！」

「ちょっと待てよ。『湖の乙女』使ったけど、あくまでも伝説聖剣（エクスカリバー）の方を使ったんだぜ？」

「なんで！？なんで使ったの！？原典の魔術は体に毒なんだよ！！」

「そう言っても『マーリンの魔法』の方が良かったか？」

「そういう問題じゃないの！？」

そこへ、３人の中で最も冷静な上条が提案する。

「お二人とも、もう少し静かにして下さいませんか」

「「ごめんなさい」」

その後の病室では、魔術の話は無くなっていた。

## 第１５話（通院）（後書き）

明日も更新する予定でいます。

誤字脱字、感想などお待ちしております。皆さん宜しくお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3555y/

---

とある学生の大学生活

2011年11月26日15時47分発行